

中島飛行機三鷹研究所 ——その疎開と終焉——

高 柳 昌 久

1. 本稿の目的

富士重工業東京事業所および国際基督教大学キャンパスの前身・中島飛行機三鷹研究所（以下、三鷹研究所と略す）について、筆者は2002年から調査を開始し、これまでその成果を「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」（国際基督教大学アジア文化研究所紀要『アジア文化研究』32号）、「中島飛行機三鷹研究所——その建設まで——」（同34号）に発表してきた。本稿は後者の続編にあたり、三鷹研究所が太平洋戦争末期に空襲を避けて疎開し、敗戦を迎えるまでを扱う。

三鷹研究所は、戦前日本の航空機メーカーの一つであった中島飛行機の、軍用機開発のための研究所で、陸軍用機体開発部門と陸海軍用発動機開発部門とが置かれていた。1941年末から建設を開始し、1943年末から1944年初め頃には稼働し始めていた。従業員は約4,000名とみられる。機体部門（正式には「飛行機総部」）ではキ-87（B29迎撃のための高々度用戦闘機）、キ-115「剣」（陸軍が特攻専用に予定していた特殊攻撃機）、発動機部門（正式には「発動機総部」）ではハ-54（米本土攻撃のための超大型爆撃機「富嶽」用発動機）、ハ-44（キ-87等に搭載予定）等の開発を試みていたが、すべて実用化には至らなかった¹⁾。

筆者は齊藤勉氏（都立高校教諭）による三鷹研究所の東北疎開についての調査²⁾に刺激を受け、2004年8月、安藤邦彦氏（北上市教育委員会）、池田友敬氏（北上平和記念展示館館長）、加藤昭雄氏（岩手県立高校教諭）の協力を得て、疎開先である岩手県北上市で現地調査をおこなったところ、三鷹研究所機体部門の地下工場跡を発見することができた。さらにこの調査に関する朝日新聞の記事³⁾によって、皆川進氏⁴⁾と連絡を取ることができた。皆川氏は元中島飛行機技師補で、この地下工場の設営担当であった。氏は面接による聞き取り調査（2005年9月1日）に応じ、回想記「中島飛行機(株)三鷹研究所の岩手県黒沢尻地区への工場疎開」（2006年7月）もご執筆下さった。また、当時の貴重な資料89点を保管されていた。この資料に関しては、朝日新聞とNHKによって報道された⁵⁾。

本稿では、上述の調査結果に加え、多くの方々からの聞き取り調査や、牛田守彦氏、太田繁一氏、小沢正氏、齊藤勉氏、新田安信氏、林博史氏、松田稔氏等のご協力で得られた資料などに基き、太平洋戦争末期における三鷹研究所の全般的状況を、現時点ででき得る限り、明らかにするものである。空襲下の総力戦において、日本がどれほどのエネルギーを三鷹研

究所という一組織に注いだかを見ることで、アジア太平洋戦争の一側面を解明する一助となると考える。

本稿の作成においては、すでにお名前をあげた方々をはじめとする多くの方にご協力をいただいた。ここに厚く御礼を申し上げたい。文中においては敬称を略させていただく。

なお、文中の「 」内の引用文は原典のままではなく、筆者による内容の要約であることをあらかじめお断りしておきたい。

2. 米軍による空襲と三鷹研究所

2.1. 三鷹研究所関係者の回想

a 概要

米軍は中島飛行機武蔵製作所を中心とした航空写真を捕虜に見せ、1944年12月には、三鷹研究所が武蔵製作所や同社の荻窪製作所と関係した発動機工場であると把握していた。しかし三鷹研究所を空襲の標的としたことはなかったようである⁶⁾。それでも三鷹研究所は空襲を受け、施設の被害は軽微であったが工具4名が死亡した。

b B29の飛来と迎撃

1944年11月1日、アメリカ軍が占領したサイパン島から、初めてB29の偵察機型F13が高空からの東京偵察を目的に飛来した。同年11月24日、111機のB29が同機種としては初の東京空襲を行ったが（すでにB25により1942年4月18日東京初空襲は行われていた）、この時に標的となったのは当時日本最大の航空機用エンジン工場であった武蔵製作所であった。三鷹研究所の設計本館（「研究本館」とも呼ばれ、改築されて現在ICU大学本館）には、武蔵製作所から運びこまれたエンジン部品が、たちまちのうちに階段裏や廊下の隅々に山積みとなった⁷⁾。

三鷹研究所に隣接する調布飛行場からは、B29迎撃のため戦闘機が飛び立った。迎撃の主な戦法は「体当たり」で、三鷹研究所にいた人々も鮮烈な印象を受けたようだ。動員されていた都立玉泉中学学徒の回想を要約する。

「B29を迎撃し、小さな戦闘機飛燕が体当たりしていく姿、必至に紐を引くが落下傘が開かず、落ちていく飛行士……」⁸⁾。

「迎撃を終えて調布飛行場に着陸していく戦闘機の中に、片翼がないのを一瞬見たとA君らが言い出して、まさか、いや本当だ、とやり合ったりした。新聞に、B29に勇敢な体当たりをして無事に生還したとの記事が出て、やっぱり、となった」⁹⁾。

「空襲の都度、工場の外の林の中に退避させられた。上空でB29を迎撃する我が戦闘機の空中戦もこの林の外れで望観し、機首をもがれたB29がふらふら落下するのを見て歓声をあげたこともあった」¹⁰⁾。

c 1945 年 2 月 17 日の艦載機による空襲

1945 年 2 月 16 日早朝、アメリカの空母機動部隊が東京の東南約 200 km の洋上に現われた。艦砲射撃で攻撃を開始した硫黄島への日本軍機による援護を阻止するため、関東地区の航空施設を制圧することが目的だった。多数の艦載機による攻撃が朝から始まり、午後には調布飛行場にも飛来して機銃掃射を行なった。この日は日本軍機との間で空中戦となった。しかし防衛総司令部は既に本土決戦までの戦力温存方針を固めており、損害をなるべく防ぐため小型機に対する迎撃を制限していたので、翌 17 日の朝、調布飛行場を基地とする戦闘機部隊・飛行第 244 戦隊は、内陸深く安全と思われた西那須野飛行場に退避した¹¹⁾。

2 月 17 日も朝から多数の艦載機による攻撃が再開され、武蔵製作所は約 60 機による激しい攻撃を受けて、午前 9 時 55 分には火災が発生し、壊滅的な被害を蒙った¹²⁾。午前 10 時 15 分頃には三鷹研究所も艦載機の襲来を受けた。爆弾が発動機試作工場近くの防空壕に落下したため、避難していた工員 4 人が死亡した。土が凍っており救助に手間取ったためともいう¹³⁾。

「飽くことなく繰り返される銃撃を待避壕から窺うと、はるか彼方に急降下して姿の見えなくなった敵機が、突然地上すれすれに現われると、一斉に機関砲や機関銃の乱射をはじめ。立ち上る砂煙の間から操縦席の風防を開き、身をのり出して地上を見下す搭乗員。黒ぶちの大きな眼鏡をかけた姿はとてこの世のものとは思われず一瞬血の気のひくのを感じた。敵機の去った後の工場のスレートの屋根は穴だらけとなり、折角作り上げた機材や機械は使いものにならぬ姿になっていた」¹⁴⁾。

「発動機工場の防空壕に爆弾が落ちた後、格納庫にいた自分たちにもツルハシやスコップを持ってそちらに行くようにとの指令があった。ところが出ようとすると低空飛行で中の飛行機が見えたのか、艦載機が格納庫に向かってきて銃撃した。格納庫の西側には一列に杉の若木が植えられていたが、銃撃で地面から 1 m 半程のところで揃って折れた。低空飛行の風圧で木が揺れ、パイロットが旋回した後振り向くのが見える程だった。銃弾で口元をやられた工員を背負って野川沿いの防空壕に避難したが、気ばかり焦って脚がいうことをきかなかった」¹⁵⁾。

「研究本館の窓から顔を出していたら艦載機に銃撃された。どす黒い色に塗られ、星のマークや操縦席の後ろの機関銃やそれをこちらに向けている人間も見えた。あわてて机の下に隠れた。本館の廊下に銃弾が転がっていたという話も聞いた」¹⁶⁾。

d その後の空襲

これ以後、空襲は勤務中のものだけでも十数回に及んでいる¹⁷⁾。3 月 17 日に硫黄島が占領され飛行基地が整備されると、4 月 7 日から陸上戦闘機の P51 ムスタングも飛来するようになった¹⁸⁾。

「白昼、戦闘機の一群がやってきて、本館に銃撃を加えていったこともあった。尖った頭

をした戦闘機で、後日それが P51 ムスタングであることを知った」¹⁹⁾。

B29 による空襲も続行され、日時が特定できないが夜間空襲もおこなわれた。

「一度、夜間空襲で三鷹研究所内にも爆弾が落ちた。幸い建物を外れていたが、翌日見ると直径 10 m ほどのすり鉢状の穴が巨人の足跡のように続き、ひと抱えもある松の木がへし折られていた」²⁰⁾。

夜間空襲については、近隣の防空壕に避難していた住民も、「ハンパではない音と地響きだった。教えられた通り、両手で目と耳を押さえ口を開けた。怖さと寒さでガタガタ震えていた」と回想している²¹⁾。泰山荘も揺れ、タンスの上の物が落ちてきたという²²⁾。

「照明弾が落とされると月明かりより明るくなって、どちらに逃げたらよいのかわからなかった。迎え撃つ高射砲の砲弾の破片も落ちてくる。飛行機を破壊するため鋼鉄製で非常に鋭い。竹藪に落ちてカタカタッと音がしていた。頭に座布団をのせて防ごうとした。六角形の焼夷弾が格納庫・研究本館のあたりにもずいぶん落ちた。触ると入っている油が手に着きなかなか落ちない。B29 は日本側のレーダーの電波妨害のため、錫のテープを大量に落とした。上空でサラサラ音がしていると思うと、かたまりになって落ちてくる。空襲後、三鷹研究所の警備員が集めたら 1 m 半ぐらいの山になった。戦後それを近所の農民が田畑に立てるかかしに利用していた」²³⁾。

「夜間空襲の翌日、自分たちが入ることになっていた野川の崖の防空壕に行ってみると、入口に直径 50 cm ほどの穴がナイフで切ったようにすっぱりと開いていた。不発弾だったが、もし自分が入っていて爆発したらどうなっていたかわからない」²⁴⁾。

当時は「特殊爆弾」と呼ばれた原爆投下のニュースも伝わってきた。「広島に落とされたニュースはたちまち伝わり、そのショックで廠長以下皆すっかり青ざめてしまった。そんな爆弾を落とされたら大変だと廊下を走り回っている人もいた。白い布を被るとよいということが言われていた」²⁵⁾。

また日時は特定できないが、三鷹研究所従業員用の営団住宅であった東野住宅にも 2 箇所に爆弾が落ち、17 組のあたりでは防空壕が木っ端微塵に破壊されて数名が生き埋めになった。救出作業が行われたが、母親の背中に負われていた赤子は死亡した²⁶⁾。

2.2. 三鷹研究所の防空対策

米軍資料の中には、三鷹研究所及び黒沢尻（機体部門の疎開先）の防空体制を記したものと思われるメモが収録されている。これは戦後になって米軍の要請に応じ、中島飛行機の従業員が書いたものと推測される²⁷⁾。これによれば「従業員全員により編成された特設防護団として、防護団本部（防火係、警備係、警報伝達係、灯火管制係、避難誘導係、救護係、工作係、庶務係）が設けられ、その下に機体分団、発動機分団、総務部分団が設けられた。分

団は、防火班、警報伝達班、灯火管制班、避難誘導班、救護班、庶務班から成っていた。夜も防空にあたる少人数の要員が配置された。警報は発令とともに本部から伝令・警報・電話・信号旗で各分団に伝えられた。警戒警報により、女性と『幼年工』が優先的に待避し、空襲警報により一応全員が待避した。爆撃の激化に伴い各職場別に分散して遠方に退避した。隧道式地下壕を建設したが被害が大きくなることを恐れて使用せずに終わり、主に器材保管に使用した。市内各病院を仮救護所とした。」ということである。

動員されていた学徒の証言によれば、空襲時の退避先は、三鷹研究所内にいくつも造られた竪穴式防空壕、野川崖面に掘られた横穴式大防空壕、近隣の森などであった²⁸⁾。この横穴式大防空壕とメモの「隧道式地下壕」が同一のものかどうかは不明である。

このメモによれば、施設の防護法は「幹線道路を不明瞭とするために土や植樹で狭くする。未完成道路は工事を中止する。空地の緑化を計画。建物は黒色明暗の迷彩を施す。主要器材は作業場内の特設壕に常時収容の上使用する。発動機類は防壁で防護する。主要治具、型扱および芯金具類の一組を隧道式地下壕に保管する。」であるが、実行の程度は不明である。建物に迷彩を施したとの証言は、三鷹研究所については得られていない。

2.3. 多磨霊園付近への工場移転

空襲激化に伴い、機体部門の小物部品製作を担当する班は、多磨霊園北側に並んでいた墓石加工業者作業場に移転した。当時石屋は客の減少、軍による職人・徒弟の徴兵や徴用により、どの店も営業不振だったという。作業場には内部を隠すためと風よけのため、杉皮をトタン板のかわりに張りめぐらした²⁹⁾。

3. 国営化に伴う組織の改編

本土空襲の激化によって政府は航空機生産の維持増強のため、航空機工業国営化を決定した。1945年4月1日、政府は生産設備貸与、従業員供用という形で中島飛行機を国営化して、第一軍需工廠を発足させた。この時までに中島飛行機は就業人員約25万人の巨大企業となっていた。三鷹研究所は機体部門が第二十一製造廠（廠長はキ-43「隼」等の設計で著名な小山悌）、発動機部門が第二十二製造廠（廠長は日本初の航空機用発動機「寿」を設計した関根隆一郎）となった。総務部は二つに分割され、それぞれに吸収された³⁰⁾。三鷹研究所の機体部門の工場は皇国第3045工場、発動機部門の工場は皇国第861工場と呼ばれることになった³¹⁾。

4. 三鷹研究所機体部門の疎開

4.1. 軍需省による命令

政府は生産低下を恐れて航空工業の防衛分散を躊躇していたが、空襲の激化によって方針を転換し、1945年2月23日に工場緊急疎開要綱を決定した。3月6日に陸軍省軍事課が起

表1 機体部門の疎開計画

	場 所	機 能	利用する既存施設	左記総坪数	予定人員
岩 手	黒沢尻	本部、設計、計画	中学校、工業学校、倉庫、店舗	約 2,000	910 (510)
	花 巻	集成部品	中学校、療養所、翁酒倉	約 3,830	690 (610)
	横川目、江釣子	熱処理、溶接部品	未定 ※地下工場を新設予定	約 500	220 (165)
	後藤野	総組立、整備、試飛行	岩手飛行場 ^{a)} 同付属設備	約 1,240	370 (310)
	岩谷堂	機械部品、治工具	青年学校、高惣製材、国民学校、女学校、倉庫、店舗	約 1,830	350 (250)
	水 沢	板金部品	商業学校、公会堂、劇場、岩手航空	約 1,330	1,270 (1,190)
	盛 岡	盛岡鉄道工機部、その他の協力工場を利用。			
秋 田	横手、湯沢	機械部品	横手酒造、農業倉庫（横手町）、 営林署倉庫（十文字）、農業倉庫（十文字町）、酒倉	約 3,820	1,200 (700)
	秋 田	土崎鉄道工機部、その他の協力工場を利用。			

a) 岩手陸軍飛行場（通称、後藤野飛行場）。敷地面積は 120 万坪。1938 年岩手県民の献金と青少年の勤労奉仕によって建設され、県から陸軍に奉納された。1944 年から熊谷陸軍飛行学校岩手分校所が置かれ 1945 年には特攻隊の訓練・出撃基地ともなった（加藤昭雄『後藤野——最北の特攻基地——』『後藤野』を刊行する会、1995 年）。

案した「空襲下航空機生産ノ今後の見透竝対策」には、まず現在の工場所在地近辺に疎開した上で（2.3. で述べた三鷹研究所の機体部門の多磨霊園付近への一部移転はこの例と考えられる）、段階を追って 7 月には地下工場での航空機生産を主とする方針が示されている³²⁾。

1945 年 3 月 30 日付けの軍需省作成の「岩手秋田地区建設の大綱(案)」³³⁾には、「現戦局に鑑み三鷹研究所における設計・試作関係部隊を速やかに岩手秋田地区に分散し、1945 年度末にはキ-87 月産 100 機の生産体制を確立する。キ-87 生産の立上りを促進するため取敢えずキ-115 を生産させることを方針とする」との記述が見られる。この資料の疎開計画をまとめると次の表 1 のようになる。

この表の「総坪数」を合計すると約 14,550 坪となるが、さらに既存施設約 10,000 坪を獲得し、地下工場（6,000 坪。横川目・江釣子には地下工場建設を予定している）・分散工場計約 10,000 坪を新設して、1945 年度末には 35,380 坪とする予定だった。「予定人員」は 1945 年 7 月時点の数字である。（ ）内は現地採用者数で、その他は移転者である。総計 5,010 (3,735) 名。1945 年度末には計 14,710 名とする予定だった。

4.2. 陸軍による命令と三鷹研究所の対応

1945 年 4 月 4 日軍需省は、三鷹研究所に対し疎開を命じた³⁴⁾。しかし中島飛行機の疎開準備はそれより早く始まっていた³⁵⁾。三鷹研究所機体部門の東北への疎開準備も、この命令以前に発令された陸軍命令により、1944 年後半には開始されていたようだ。

東北疎開の準備にあたった元機体部門総務部企画課係長、西村忠雄によれば、「1944 年のまだ暖かいころに陸軍から極秘に疎開せよとの命令が下り、総務部長と仙台に行くと、第四方面長官の早川大佐に仙台より北に疎開するよう言われた。岩手県花巻に行ったが高圧電線が無く電気を引くことすら難しい。長官に飛行機なんてとてもできませんと言ったが、とに

かくやってくれとのことだった。歩き回っているうちにそれでも出来そうな気がしてきた。黒沢尻（現、北上市）の南部ホテルを借り切って事務所とした。設計などの従業員の名簿を持って下宿先も1軒1軒決めていった。地元の県会議員などの有力者の援助も受けた。B29が東京を初空襲した頃から雰囲気が変わり、疎開準備も本格化した。疎開工場が広い範囲に分散しているのは空襲されにくいようにするということ。工場に必要な電力・道路・人手があるのは学校などがある村の中心。それで学校の校舎などを工場に用いることになった」³⁶⁾。

第二十一製造廠次長松田敏夫が戦後書いたメモ³⁷⁾には、時期は不明だがこの前に起ったと推定される内容が見られる。「小山梯廠長と松田が陸軍航空本部の横井大佐から急に呼び出され、『米空軍にすぐに叩かれることになる³⁸⁾』のでその前になんとかして緊急対策を取る。特に大切な技術陣を東北の山中に温存する。仙台地区の長の早川大佐に話を通してあるからすぐ連絡を取り対策をたてて返答してくれ』と言われた。そこで早川大佐に連絡を取った。しかしすでに仙台には先手が押し掛けているので手遅れだが、岩手（花巻・黒沢尻）ならば何とかなるといことで、岩手地区に疎開することになった」。

ただし1945年1月以降も、八高線沿線や会津若松への疎開も検討されていたという。陸軍の疎開命令を受け、中島飛行機側が方策を探っていたものと思われる³⁹⁾。

4.3. 岩手県側の受入れ

「疎開工場受入二関スル件」（岩手県永年保存文章「昭和20年引継書庶務課」）によれば、岩手県は県内有力者を網羅したと思われる岩手県工場疎開対策委員会を設置し、委員会はすでに1945年1月30日から工場の受け入れ体制整備に努めていた。受け入れ方針には「岩手県における工業の現状は原料生産および素材工業に比べ完成品工業が低位であり、これは決戦下の国土計画的見地からしても遺憾であるので許容範囲内において積極的に疎開工場を受け入れ、総合的有機的工業力の伸長を期する」とあり、岩手県が疎開を利用し、県内産業発展を目指していたことが窺える。また疎開工場の配置については「軍需省・東北地方工場疎開委員会に従うが、できるだけ既存工業地帯と関連させて両者の生産力増大を図り、そうでない場合は既存建物を動員し、特に労働力・食料・輸送・動力・防空を考慮する」とされている。

この資料にある「疎開工場受入一覧表」（1945年4月20日作成）の三鷹研究所の疎開計画は本稿4.1.に示した軍需省の計画とはほぼ一致しているが、工場の必要面積が約3万坪（そのうち約1万坪を取得、約2万坪は未取得）、1945年上半期の人員予定が3,810名（現地雇用者3,035名）である点に計画の縮小が見られる。

4.4. 疎開作業の開始

三鷹では「連日、機械を梱包し木札を付け送り出す作業が続き、工場の中はコンクリート

の基礎を残し今まで以上に広々として見えた」と回想されている⁴⁰⁾。前出の「中島飛行機(株)三鷹研究所の岩手県黒沢尻地区への工場疎開」には次のような記述がある。

「研究所本館裏の木工場では、疎開する際の家財用の梱包箱も大量に造って無償で配給された。……設計部本体の第一次家族ぐるみの疎開が3月10日東京大空襲の翌日の夜行列車だった。客車2両を貸切になっているも、空襲による被災者は着のみ着のままで北の田舎へ帰るのか、窓のガラスを割ってまで入ってきた。……目的地の黒沢尻駅に到着すると網棚の荷物がいろいろ盗まれ、乳飲み子を抱えた技師が持ち込んだおしめの入った子供の衣類も盗まれていた」。

設計部長青木邦弘の回想記には、「4月初めのある日、われわれは半分焼け野原と化した東京を後に、いまだに見ぬ岩手県に向かって出発した。……先方に着いてみれば、三鷹研究所がそっくり収まるような建物があるわけではなかった。……都市部を避け鉄道に沿った10ヶ所ほどの町や村に、職場別に分散して収まることになっており、もっとも遠い所は秋田県にまで及んでいた。各職場間の連絡や、当時の交通事情からして輸送関係のことなど考えると、こんなにはばらばらの状態で飛行機が造れるのだろうかと思われた。内心では、この時点でわれわれと航空機との関係は事実上断絶したと思わざるをえなかった。われわれは……なんの指令もないままに飛行機造りの準備に非効率な行動を繰り返すばかりであった」と述べられている⁴¹⁾。

工具も次々と岩手に転動した。

「水沢行きを命じられた。私は三鷹出身なので地元に残りたいと言ったが、中隊長にビンタされて諦めた。そして工場内にあった材木で木箱を作り、布団を詰めてあらかじめ水沢に送っておいた。夜9時に汽車で上野を出た。ところが宇都宮が空襲だということで、その手前で汽車はストップした。やっと発車して福島に着きそうになったが、福島も空襲だということでまた汽車はストップした。仙台に着いたらホームだけ残っていて家々が焼けていた。次の日の夕方4時半に、やっと水沢に着いた。その間ほとんど食料はなく、水筒は持っていたので、夜止まった駅の近くの水溜りの水を入れて飲んでいた。夜が明けて見るとそれは泥水だった。水沢に着いたが布団はまだ届いておらず、布団なしでしばらく寝るしかなかった」⁴²⁾。

動員されていた学徒の中にも移動した者がいた。

「4月ごろだったと思うが、黒沢尻に疎開した。疎開前に疎開に必要なということで、クレーンの設計をやらされたが途中になった。

駅から離れた農家に3人で下宿した。農家の母屋には馬も飼われていて初めてしらみにたかられた。お米は豊富で白米を初めて食べることができた。大きな粒の納豆がよく出た。天井にはわらで包んだ味噌球が並んでいた。

そこの中学校で仕事をするようになっていたが、机などの道具が到着せず、野球をしたり、北上川で釣りをしたりして遊んで過ごした」⁴³⁾。

4.5. 機体部門の疎開の概要

敗戦時における機体部門の疎開状況をまとめたのが表2である。結局敗戦まで疎開工場では部品の製造はできず、他から運んだ部品を花巻・藤根で組立て、キ-115「剣」を3機程完成させたにとどまったようだ。なお三鷹では最後までキ-115「剣」の改良が続けられていたという⁴⁴⁾。

また、米軍資料には「中島飛行機三鷹研究所東北疎開要図」(図1)⁴⁵⁾が収録されている。

4.6. 横川目の状況

a 計画

1945年6月4日付「扶桑一八六〇第一号 昭和二十年六月四日 設営担当者皆川進 扶桑第一八六横川目工場設営計画書並ニ現状報告書」(皆川進所蔵。以下、皆川資料と略)によれば、横川目への疎開予定の詳細は次のようなものであった。

「横川目では部品部隊の板取・整型プレスの作業の中でも、特に重設備・電気点溶接・熱処理をおこなう。電気点溶接の施設は7月末、その他の施設は10月末の完成予定である。

吉澤地区の山裾の国有林に間組の担当で地下工場を三つ建設し、一つは2,000 t ゴムプレス⁴⁶⁾用(図2・3参照)、二つは熱処理炉用とする。

さらにセコスタンプ、ストレッチャー、成形用の木造工場を1棟ずつ建設する(図4参照)、蛭川地区の国民学校の講堂に電気点溶接、教室1階に表面処理、2階に事務所を置く。青年学校にも電気点溶接を置く。小使室を変電室、物置をボイラー室とし、コンプレッサーを置く建物は新設する。倉庫は横黒館を用いる。さらに間組の事務所と倉庫も流用する」。

さらに報告書には、「現在地下工場は20 m 程度の坑道が完成している。岩質は凝灰岩。火薬や照明用カーバイトが不足しているが、昼夜作業をおこなっている(建設労務者は5月20日現在約50名⁴⁷⁾。その後増員され7月2日には1日平均272人となる⁴⁸⁾)」。

現在人員は三鷹からの転勤者6名を含む14名⁴⁹⁾であるが、さらに現地で131名採用する予定である。

住宅は職場の2 km 圏内に100軒必要だが、70軒は確保した。ほとんどは農家で電燈がなく便所や台所の改修が必要である。寮も3軒必要だが、廃業した駅前の蕎麦屋1軒を確保した。食堂は旅館を改造して1軒確保し、浴場も新設予定である」とある。

これに対し6月14日には三鷹にいた小山廠長から、「地下工場の換気に注意すること。各壕の連絡路は必要と思う。2,000 t ゴムプレスの地下工場は2 t 爆弾に耐えることが必要で、爆風対策も必要である」⁵⁰⁾との連絡があった。

b 3つの地下工場の計画

1945年6月17日付の複数の資料によれば⁵¹⁾、2,000 t ゴムプレス工場は、幅3.6 m、高さ3.6 m、長さ20 mの通路の奥に、幅14.6 m(又は10 m)、高さ9.1 m、長さ22 mの作業場

表2 敗戦時における機体部門の疎開状況

場 所	機 能	完成率 ^{a)}	使用施設、学徒動員、空襲など	工場通称号 ^{b)}
岩 手 県	黒沢尻 総務・設計	45%	黒沢尻中学 ^{c)} 。同校生徒も動員 ^{d)} 。「第441支廠」でもある。1945年8月10日ここが三鷹に代わり、第21製造廠の本部となった ^{e)} 。	東北神 181 工場 →扶桑第 184 工場
	花 巻 機体組立	35%	花巻中学校講堂、校舎の半分。同校生徒も動員 ^{f)} 。1945年8月10日空襲 ^{g)} 。	扶桑第 185 工場
	江釣子 板金加工	35%	江釣子国民学校講堂。八幡神社の境内その他にも用地を設定。1945年8月10日頃空襲 ^{h)} 。	東北神 182 工場 →扶桑第 186 工場 ⁱ⁾
	横川目 プレス加工	30%	横川目国民学校講堂、劇場「横黒館」など。	
	藤 根 ^{j)} 整 備	不 明	後藤野飛行場の格納庫を太田村に移動し組立工場とした ^{k)} 。	扶桑第 187 工場
	岩谷堂 機械部品	70%	劇場、酒蔵、製材所 ^{l)} 、青年学校となっていた旧岩谷堂小学校校舎 ^{m)} 。1945年8月9日空襲により旧岩谷堂小学校校舎付近で住民1名死亡 ⁿ⁾ 。	東北神 180 工場 →扶桑第 188 工場
秋 田 県	水 沢 板金部品	50%	水沢商業学校、漁網会社工場、佐倉河国民学校大講堂、岩手銘醸会社など。水沢高等女学校4年 ^{g)} が1945年4月から動員 ^{o)} 。水沢商業学校の女子商業2年 ^{g)} が1945年7月から動員 ^{p)} 。1945年8月9日空襲 ^{q)} 。	東北神 180 工場 →扶桑第 189 工場
	横 手 機械部品	20% 又は 35%	横手工業学校雨天体操場、北校舎の一部。1945年7月15日空襲で校舎に被害 ^{r)} 。	東北神 183 工場 →扶桑第 190 工場
	十文字 機械部品	20%	劇場（「劇場十文字館」後に「恵比須座」 ^{s)} ）、十文字町農業会館所有の刳貯蔵倉庫 ^{r)} 。	不 明
	増 田 機械部品	20%	大地主の米蔵 ^{u)}	不 明

- a) 場所・機能・完成率は前掲 USSBS 資料、USB-13, Roll. 222A による。完成率は 1945 年 7 月時点。その中の地図（本稿図 1）には、この他に「金ヶ崎工場」が記入されているがこれは扶桑第 189 工場に含まれるようだ。
- b) 「東北神番号」から「扶桑番号」に変更されたのは 1945 年 5 月 30 日だが、その理由は不明である。前掲「第一軍需工廠配属東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」50, 53 頁、「扶桑一八九秘第一号昭和二十年六月十四日 扶桑第一八九工場設計計画書（含扶桑一八四工場之一部）扶桑第一八九工場長 認可陸軍技術中尉奥山龍男 作製陸軍技術中尉齊藤次郎」（皆川資料）、江釣子第一小学校『百年の歩み』同校、1973 年、54 頁。
- c) 岩手県立黒沢尻北高等学校【黒陵 50 年史 1974】同校、1974 年、119 頁。
- d) 岩手県教育委員会『岩手近代教育史』第 2 巻、1981 年、1029 頁。
- e) 前掲「第一軍需工廠配属東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」56 頁によれば、これにより三鷹の皇国第 3045 工場は第 21 製造廠東京出張所という位置づけとなり、第 21 製造廠の疎開は一応完成した。
- f) 4、5 年生が動員された。前掲『岩手近代教育史』第 2 巻、1030 頁。
- g) 岩手県立花巻北高等学校【桜雲四十五年史】同校、1976 年、70, 72, 229, 230 頁。花巻中学の場所は現桜台小学校。
- h) 江釣子村役場『江釣子村史』同村、1971 年、773, 967 頁、江釣子第一小学校『百年の歩み』同校、1973 年、54, 58, 59 頁。なお江釣子国民学校の場所は現江釣子中学校である。
- i) 前掲皆川進との面接によれば、扶桑第 186 工場は板金工場で、本部は江釣子にあった。その中で大物の機械を扱うのが横川目の工場だった。板金部品は江釣子で集成し、花巻で組立てる予定だった。
- j) 図 1 に示される位置からすると太田村に設けられた最終組立工場のことと思われる。
- k) 加藤昭雄『後藤野 全国からの便り』『後藤野』を刊行する会、1996 年、38-40 頁。
- l) 岩手県立水沢商業高等学校【水商五十年史】同校、1979 年、64 頁。前掲『岩手近代教育史』第 2 巻、1058 頁は、岩谷堂高等女学校も 1945 年 3 月から疎開工場となり、動員先から帰校後の同校学徒 3、4 年が動員されたとする。しかし岩手県立岩谷堂高等学校『岩手県立岩谷堂高等学校七十年史』同校、1991 年、122 頁に掲載された座談会では、工場になるという話だけで終戦となったという。またこの資料によれば、中島飛行機が使用した劇場は「南座」だという。
- m) さらに鉄瓶製造の及源鋳造所は「中島飛行機大宮工場」が、東北鋳造所は「中島飛行機」が使用したという（水沢市史編集委員会『水沢市史 4』水沢市、1985 年、531-532 頁）。
- n) 加藤昭雄『あなたの町で戦争があった』熊谷印刷出版部、2003 年、96 頁。同書によれば 1945 年 8 月 9 日には後藤野飛行場など、8 月 10 日には黒沢尻の国産軽工業・花巻市街などに対し艦載機により激しい空襲がおこなわれた。
- o) 前掲『水商五十年史』64 頁、前掲『水沢市史』4、814 頁。水沢高等女学校は現、岩手県立水沢高等学校。同校学徒は動員先の東京航空計器工場（川崎市）が 4 月 15 日の空襲で破壊されたため、水沢に戻り中島飛行機に動員された（岩手県立水沢高等学校【水高八十年史】同校、1991 年、102 頁）。水沢高等女学校第二十・二十一回卒業生編『ここに生きる六十日——水沢高女東航学徒動員の記』1986 年、54 頁には、同校学徒の疎開工場への通勤途中の空襲体験が見られる。
- p) 前掲『水商五十年史』64 頁。この資料によれば、中島飛行機は二枚橋にも疎開したという。
- q) 駅付近に爆弾が落ち、中島飛行機のジュラルミンが吹き飛び、社員が 1 名負傷した（前掲『水沢市史』4、1200 頁）。
- r) 当時は横手国民学校に併置されていた。場所は現横手工業高校。横手工業高等学校『若った四十年の歩み』同校、1985 年、36, 37, 151-153 頁。
- s) 十文字町『十文字町史』同町、1996 年、1003 頁によれば「戦後、アメリカ国防省の資料により判明したことが、土崎空襲の後に十文字町の中島飛行機製作所分工場（坂ノ下十文字小学校跡地）爆撃があげられており、増田町からの方角、距離建物面積などがぐわしく記載されている」とある。なお「坂ノ下十文字小学校跡地」は当時劇場であった（同書、1306 頁）。
- t) 長い軍刀を吊った将校が現われ、軍需工場の設置を告げたという。倉庫にはモーターを設置したが操業には至らなかった（『あの日のあの時』を発行する会『あの日のあの時——秋田県十文字町——』同会、1996 年、171 頁）。
- u) 旋盤などの機械類は運び込まれたが、操業はしなかったという（2004 年 10 月 12 日増田町役場調べ）。

中島飛行機株式会社三鷹研究所

東北疎開要図

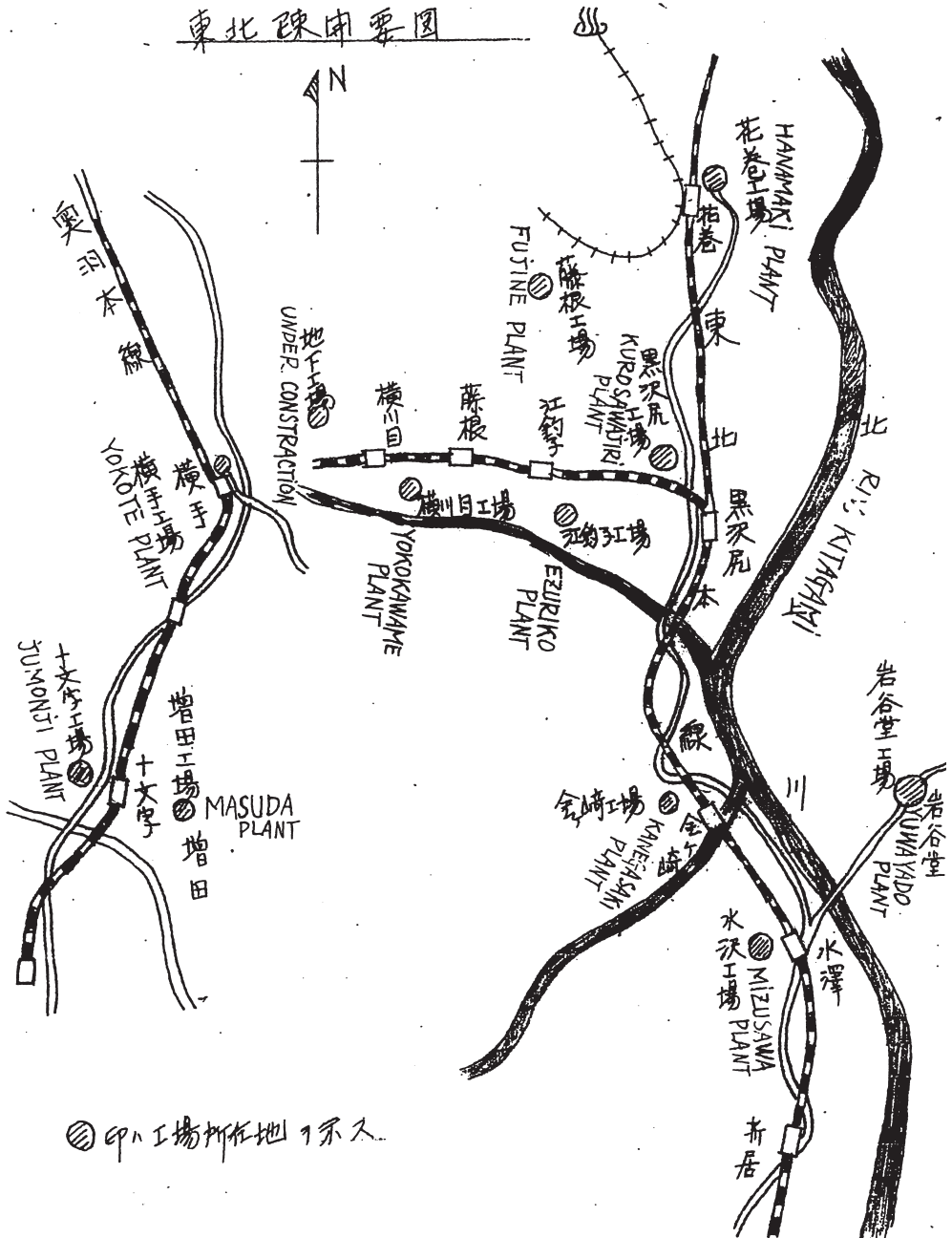
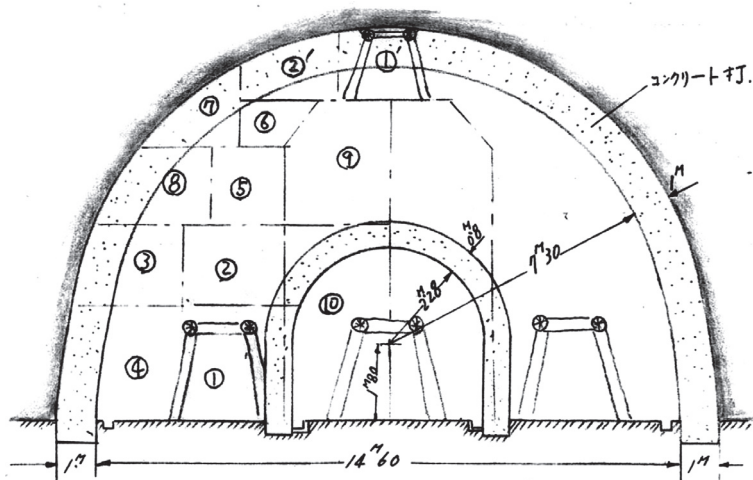


図1 機体部門の疎開要図



2000トンプレス用地下工事図。
坑道四ヶ所ヨリI番ヲ進メ番号順ニ坑内ヲ拡大ス。

図2 2,000 t ゴムプレス用地下工場工事図

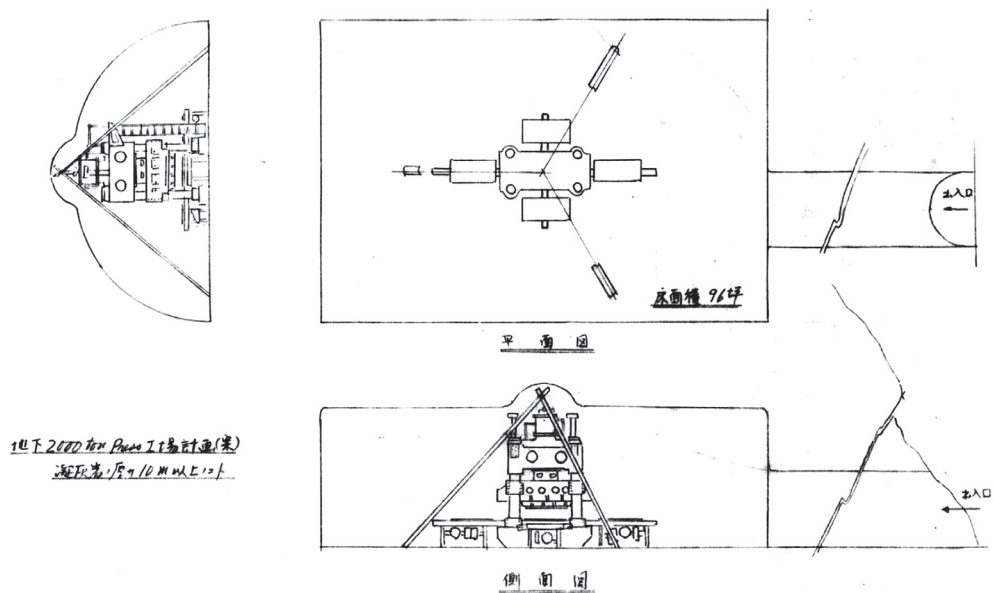


図3 2,000 t ゴムプレス用地下工場計画

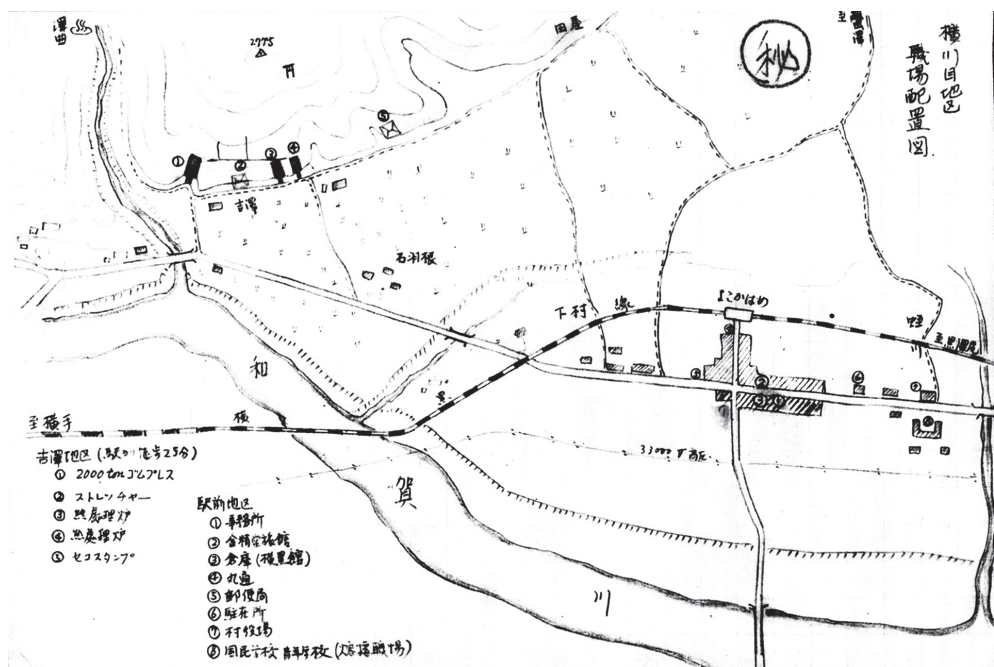


図4 横川目地区戦場配置図

を予定していた。第一号熱処理工場は、幅 3.6 m、高さ 2.5 m、長さ 15 m の通路の奥に、幅 7.6 m、高さ 5.6 m、長さ 20 m の作業場を予定していた。第二号熱処理工場は、幅 3.6 m、高さ 3 m、長さ 12 m の通路の奥に、幅 7.6 m、高さ 5.5 m、長さ 20 m の作業場を予定していた。すべて通路の上に作業場に通じる換気孔（建設時のコンクリート流入孔を兼ねる）を備え、内部は厚さ 50-75 cm のコンクリートが打たれ、地表から作業場天井までは 16 m 以上⁵²⁾を予定した。

c 1945 年 6 月下旬の進捗状況

1945 年 6 月 28 日付「扶桑第一八六横川目工場視察打合せ会覚書 20-6-28 報告者皆川進」⁵³⁾（皆川資料）によれば、この時点での工事の進捗状況は次のようなものであった。

「古澤地区では、地下工場 3 箇所は 30% 進捗し、地上工場の整地は終わった。しかしダイナマイトを使い切り 3 日ほど作業停止となった。照明用カーバイトも借用したものも含め使い切り、電線トランスを持ち込むが電線不足。釘も足りない。材木も原木は切ったのに運送するトラックが不足。資材は全て不足し、動力線と釘が特に欠乏し、現状では建設不可能。

蛭川地区の国民学校は、基礎コンクリート打ちが完了し機械は 30% 据付けた状態。

輸送も円滑さを欠くため、常時 1 台の配車を求める」。

防空対策についての話し合いの結果も記録されている。

「地下工場を掘る際の石屑の放置が問題。トロッコで和賀川に捨てる案もあるが線路が上空より見えてしまうため、石屑の上に杉などの枝や葉などで擬装する。新設の地上設備は松根タール、土、その他の塗料で迷彩する。工事用木材組付けの作業も工事現場から離れた場所か、上空から隠れた場所で行い、現場の作業も上空から見て判別が難しくなる様努める。新設の工場の高さも最小限におさえる。道路も機械運送の間だけ使い、終われば元に戻す予定。山裾にトラック通路を新設することも防空上の事情から取りやめ、リヤカー用程度の道路とする。

三つの地下工場の間には連絡用の地下道を設ける予定。通風、保管、倉庫としても使える。壕入口には爆風を避けるバリケードを設ける」。

d 地下工場第二次計画

1945年7月13日付「昭和二十年七月十三日 松田次長 横川目地下工場第二次計画」（皆川資料）には、松田次長から皆川進への指示が見られる。内容は「進捗状況からすると横川目地下工場の完成は12月末となるが、これを9月中に早めよ、またその見通しがいついさらさらに規模を3倍にするよう、1週間以内に計画を立てよ」というものである。

1945年7月20日付「横川目地下工場第二次計画並びに現状打合せ會覚書 昭和二十年七月二十日 扶桑第一八六横川目工場 皆川進」（皆川資料）はこれに対する応答である。

「9月中に完成させる計画をとのことであったが、現状なら12月一杯、資材と食料が円滑であれば11月一杯に完成となる。

現在、2交代制12時間労働の予定だったが、食料不足のため7時間の労働しかできていない。この作業は普通の重労働の数倍の労働を必要とし、しかも5割以上の残業を強要している。現在の米の配給は1人1日450gであるが、全員に150g、1日平均120名の徹夜業食給食用特別加配米として150gの特配が必要である⁵⁴⁾。

コンプレッサーを据付ければ3交代も可能だが、据付期間と部品不足のため不可能である。

スコップ150丁、ツルハシ150丁が必要である。さらに営繕課に碍子、動力線を要求しているが手に入らず、そのため据付にそれらを必要とする製材機も運転できない。火薬は間に合っているがカーバイトは質が悪く、普通の2倍必要である。

労務者を農家の納屋に宿泊させている。飯場⁵⁵⁾を作りたかったが、大工が後藤野飛行場建設に動員されているため皆無である。

地下工場第二次計画について述べれば、現在地上の工場に配置予定の電気点溶接職場、ストレッチャー職場、整形職場を地下に入れると地下工場の規模は3倍となる。しかし実行するには労務者、資材が不足している。また工事中の3箇所の地下工場の上にさらに工場を増設すると、能率よく作業できるが、一方でその工事を防空のため隠蔽することが不可能なので、工事中の工場より離れたところの方がよいかもしれない。

食料特配と、この地下工場に最優先に資材を支給することを求める」。

e 地下工場建設作業について地元住民からの聞き取り調査⁵⁶⁾

「当時は横川目国民学校の講堂は床板が剥がされ、旋盤などの機械が設置された。枱席を備えた立派な劇場だった横黒館も中島飛行機に使用されていた。防空監視所があり3交代で兵隊が常駐した。

穴を掘る工事の目的は地元の人々にもはっきりせず、飛行機を隠すためとも噂されていた。このあたりの10数軒の農家の農作業用の小屋に、それぞれ10-20人ほど朝鮮人労働者が泊まった。自分の家の小屋は工具置き場となった。役所から、そうするようにとの命令が来たのではない。当時だからいいもわるいもない。拒否はできなかっただろう。おかげで農家では、農具から藁まで母屋に入れなければならなかった。代償金があったかどうかは知らない。

彼らを使っていた会社は間組ということだった。横川目の駅前に、その事務所があった。

労働者は重労働に耐える30代ぐらいまでの人々で、飯炊きの夫婦もいた。日本人の親友が3人ほどいた。

労働は3交代制か2交代制かどうかよくわからないが、夜も突貫で作業していた。冬でも作業をしていた。穴の中は雪は降らないから。この辺りは冬30-40cmは雪が積もる。深いところは1m以上になる。

労働者が着ているものは様々で地元の人々と変わらなかった。半纏にもんぺなど。食べ物も普通。ご飯と菜っ葉汁など。食料は会社が配給していた。

小屋からの出入りは自由なようだった。監視はされていなかった。憲兵や兵隊がこのあたりに来たことはない。ただし一度労働者が2人ほど脱走して捕まり、日本人の親方に説教され詫びていた。誰が捕まえたのかはわからない。この辺りなら、よそから来た人が歩いていればすぐわかる。互いに監視しあっていたのかもしれない。

穴は愛宕山のふもとに三つならべて掘り、さらにその上にもう一つ同じ大きさの穴を掘っていた。最終的にはすべてつなげて大きなトンネルとなるということだった。しかしそうなる前に終戦となった。

そのような場所が3カ所あって、同時に工事が行われていた。家に近い2ヶ所は地質がやわらかいため戦後2-3年して潰れた。奥行きはよくわからないが30-40mほどだっただろう。家から遠い1ヶ所は、地質が硬いため今でも残っている。戦後掘った用水の穴とつながっている。

工事には、すぐ近くの横穴にしまわれていたダイナマイトが使われた。掘った岩・土は敷設されたトラックで運ばれ、土手のところに捨てられた。それぞれの穴の前には1軒ずつ小屋があって、専門の職人が、使ってぼろぼろになったタガネをふいごを吹いて治していた。削岩機もあり、当時も20-40Wほどの電気は来ていたが、まわすモーターがなかった。

戦後、立場の逆転した朝鮮人労働者たちが『帰るのに靴がない、下駄では帰れないから靴をよこせ』と騒いだ。

彼らと地元の人々の交流はなかった。戦後、彼らが自分の金で牛を買ってきてここで解体し、食べていたときに、肉をもらったことはある。この辺りの人はほとんど肉など食べたことがなかった。彼らの事故や病気などは聞いたことはない。

空襲は和賀仙人では製鉄所に対してあったが、ここにはなかった」。

f 敗戦時の状況

1945年8月7日付「各地区工場調査回答ノ件 昭和二十年八月七日 扶桑第一八六横川目工場皆川進」(皆川資料)によれば、「機械で設置できたのは蛭川地区における電気点溶接の一部だけで、他はまだ工事中である。現在セコスタンプの設置を急いでいる。事務所が手狭なため新たに敷地400坪を契約し、2階建ての事務所の設計も出来た。寮は男子寮3軒、女子寮1軒に増えた。防空体制は整っておらず、吉澤地区の間組の工事の迷彩も完全ではない。建設作業への食料の増配が必要である。建設資材も全て営繕課などを通して要求しているが不足が多い。大工も不足しており8月は30名を申請したが、現在配置されているのは10名であり、1日の平均就労は5・6名程度。現地入職者は少なく男子は皆無」。

1945年8月9日付「扶桑第一八六第六号 工事場偽装迷彩実施ニ関スル件 扶桑第一八六工場長 陸軍技術大尉 奥山龍男 昭和二十年八月九日 株式会社間組殿」(皆川資料)には次のような指示がみられる。「敵機が頻繁に来襲し、疎開及び地下工場の発見に躍起となっているにも関わらず、工事の秘匿には不備欠陥が多い。全員に事の重要性和防諜観念を徹底させた上で石屑、機械、資材の草木での偽装を即時実施せよ」。

g 敗戦後と現状

敗戦後について、動員学徒だった黒住武は次のように回想している。「心にかかったのは、横黒線地区の後始末のことであった。惜しみなく協力してくれた村人のために、資材倉庫に転用された芝居小屋だけでもせめて復旧したい。平和な農村のほとんど唯一ともいえる娯楽施設が、イの一番に日の目を見えるということは、長い戦争のあとだけにいかにもふさわしいことのように思えた。部長の快い承諾を得て、仕事を一任された黒住は、早速横川目に赴き復旧の手をうった。……銭に贈られた一老婆の心づくしのビールびん一つの濁り酒とともに、芝居小屋の復旧は快い思い出の一つとなった」⁵⁷⁾。

1947年12月23日付「地下工場報告 富士産業株式会社岩手工場 昭和22年12月23日現在調」(皆川資料)によれば、2,000tゴムプレス用の地下工場、二つの熱処理炉用の地下工場の工事進捗率はすべて50%で、戦後素掘のまま放置された。

2004年8月に筆者らがおこなった現地調査（計測は安藤邦彦）では、愛宕山南側の愛宕神社近くの山裾に三つの地下工場建設跡が確認できた。

熱処理工場となる予定だった東側二つは落盤で入口が塞がり、幅約12m、高さ約7mの窪みとなっていた。

最も西側に位置する2,000tゴムプレス工場となる予定だった場所には、三つの長方形の穴（幅約2.5m、高さ約2m、奥行きは西側のものから約60m、約30m、約29m）⁵⁸⁾が並行して掘られており、さらにその上にもう一つの穴が見えた。本稿図2の①と①'の「坑道」であろう。下に並んだ三つの穴の、西端から東端までの距離は約12m、下の中央の穴から上の穴までの距離は約7-8mである。

なおストレッチャー工場予定地には山裾を削り整地した跡が見られた。

4.7. 水沢の状況

a 計画

1945年6月14日付「扶桑一八九秘第一号昭和二十年六月十四日 扶桑第一八九工場設計画書（含扶桑第一八四工場之一部）扶桑第一八九工場長 認可陸軍技術大尉奥山龍男 作製陸軍技術中尉齊藤次郎」（皆川資料）によれば、水沢への疎開予定の詳細は次のようなものである。

「9月にはキ-115『剣』月産60機を目指し、それを次第に岩手航空・大宮航空に移行した上で、キ-87やキ-201⁵⁹⁾の生産も予定する。

水沢商業学校に第一工場（構造部品——機体の骨組——を造る部品部隊・溶接部隊）、製鋼（ただし「製綱」という記述も見られる）組合に第二工場（槽・覆部品——タンク・風防・排気管等——の溶接部隊）、金ヶ崎『千紫園』に処理工場（（熱）処理部隊）、公会堂に仮設の食堂、水沢劇場も用いて倉庫を3ヶ所、さらに本部を2ヶ所、事務所を5ヶ所設置する。横川目・江釣子に地下工場を建設し、移動が困難な重設備を置き、空襲に対する万全の措置を取る。各地区との連絡用にトラック2台、軽トラック2台、冬季用に馬車2-3台用意する。既成の建物については6月中旬に工事をおこない、7月から作業を開始することを目標とする。

現在従業員は90名であるが、最終的には転勤者300名、現地採用者960名、計1,260名に増員する予定である。そのため既存の工具寮などに食堂を増設し、寮を5ヶ所確保する。

小山飛行場⁶⁰⁾建設と時期が重なったため、輸送や労働力について困難があるが、着実に作業が進んでいるのは、町長など町の有力者に負うところが大きい」。

「部品第一回進捗会議覚書 昭和20年7月11日 水沢にて 陸軍技術大尉奥山龍男」（皆川資料）によれば、水沢では7月中に、キ-115 I型、キ-115 II型⁶¹⁾、キ-115 III型⁶²⁾、キ-87の1号機改修部品の製造が予定されていた。

b その後の状況

実際にどれだけの施設が工場となったのかは不明だが、水沢商業学校（同校の工場は小さな部品を磨く工場だったので、床板をはがしたままの土間に作業台を置いた程度であったという）、三本木の魚網会社工場、岩手銘醸会社（板金部が置かれた）、佐倉河小学校大講堂（1945年6月から）などは実際に工場となった。小林洋品店・郷右商店には工場の事務所が置かれた。工場にも事務所にも防諜のため看板は出さなかったという⁶³⁾。

水沢で敗戦を迎えた工員は次のように回想している。「板金や溶接の仕事をしていた。8月15日は仕事がなく、北上川で遊んでいた。玉音放送があるというので工場に戻ったが、雑音がひどくて聞き取れなかった。数日後、かねてから嫌われていた中隊長が大きな農家の倉に機体の材料をしまい込んだことを、部下が嗅ぎ付けて発覚した。材料は従業員一同に分配されることになり、自分もブリキの板とジュラルミンの板を貰った。ブリキ板は水沢の靴屋で編み上げ靴と交換した。畳一畳ほどのジュラルミンの板は、布団に挟んで三鷹の実家に送り、自分でお玉杓子などに加工した」⁶⁴⁾。

戦後、三本木の工場が中島飛行機から分岐した岩手富士産業の水沢工場となった。

4.8. その他の疎開工場の状況

a 黒沢尻

設計部門が移転したという黒沢尻中学の校舎は、屋上から縄を垂らし南瓜をからませて擬装された⁶⁵⁾。しかし用具不足などで、設計の仕事はほとんど行われなかったようだ。

当時ここに勤務していた及川力男は次のように回想している。「黒沢尻中学には当時100人ほどの中島飛行機の従業員がいた。私は勉強がてら、戦闘機『隼』の電気まわりの部品を揃える作業をおこなっていた。B29から外したエンジン始動用のマグネットがあった。手で回すとすごい火花が散った。付近の枯れ草を集めてきて手で巻いて作ったタバコも、1分ぐらい回すと火がついた。こんな強いマグネットは日本では作れないと話していたのを覚えている。

B29の13mm機関銃もあった。三鷹から持ってきたものでB29の後部に付けられていたものだと聞いた。終戦後、こんなものを持っていたことが進駐軍に見つかるとういへんなことになるということで上司に命じられ、1人では無理なので2人で学校南側の松の下に埋めた。1990年に自分が仲間と発掘した」⁶⁶⁾。

現在北上平和記念展示館にはこの13mm機関銃が展示されている。

また北上市和賀町山口のT氏宅には、中島飛行機の蔵書印のある本が5冊、木製の製図用机・イスが保管されている。T氏によれば、戦後中島飛行機の幹部が地元の農家の食料と物々交換したもので、当時彼らは部下やその家族を食べさせるのに必死だったという。

b 花 巻

岩手県立花巻北高等学校（当時、花巻中学）の校史には、「1945年3月14日学校工場につき打合せ。4月13日中島飛行機疎開防諜上遺憾なきよう憲兵が来校。4月17日搬入開始。5月31日『第181工場』⁶⁷⁾の入魂式。6月2日裏校舎も明渡し。6月21日同校学徒により校舎の白壁に迷彩。8月10日校舎も機銃掃射を受ける。敗戦後は解体作業に学徒を動員。8月25日には工場の解散式」という記述がある⁶⁸⁾。

元花巻中学学徒によると、「8月に花巻中学に行ってみると『剣』を造っていた。教室棟の一階には4つほどの教室があり、木の架台が置かれ、たぶんそれほど多くない100人ほどの女子挺身隊がアルミの骨組みにリベットで金属の板を打ち付け、胴体や翼を作っていた。あれは屋根さえあれば出来る簡単な作業だった。2階は教室のままだった。講堂では天井からワイヤーで、ほぼ完成した剣の機体が吊るされていた。機体のお尻のところにボルトで20cm角の鉄板が何枚か固定されており、バランスを調整しているんだと思った。大工さんが垂木で座席用の椅子を作り、藁を載せレザーで覆っていた」⁶⁹⁾。

花巻中学では、4月から作り始めた1号機が7月頃完成したが、胴体だけでも大きすぎて講堂の入口を壊さなければ外へは出せなかった⁷⁰⁾。

校史には終戦後の様子を伝える記述がある。「解体作業で工員たちは走りまわっていた。すぐ手伝えと言われ、私たちは土手に掘った穴に飛行機の部分品などを運んだ。……大人たちのあわてぶりは、夕やみせまる夏の日にとこのほか印象に残っている。銃器類も油をかけて、校庭の真ん中で焼いた。今のFire Stormのように、まわりをかこんでワイワイと私たちは燃やした。こんなにあかあかと夏の夜空をこがすようなことは、戦争中の灯火管制下では、とても考えられないことだった。……フト静かになった。……みんながふり向いた方向、ゆらめく炎の光の中に、独りしょんぼりした人は剣道の先生だったろうか。『これで日本はおわり！ 俺もおわりだ！』と涙を流してつぶやいていた、と誰かが言っていた」⁷¹⁾。

c 江釣子

江釣子には、扶桑第186工場の板金部品を集成する工場と本部が置かれた。しかし江釣子村からすれば厳しい至上命令に服従して施設を提供したものの、当時は詳細が全く知らされない「まぼろしの工場」だったという⁷²⁾。

江釣子国民学校の校舎、便所は、第一軍需に毎月600円の賃貸料で貸与された。講堂の敷板は全て剥され、コンクリートを敷きつめて工作機械が並び、材料も運び込まれた。防諜のため校長ですら内部を窺うことはできなかった。1945年8月10日頃の空襲では、講堂の上から斜めに何発もの機関砲を打ち込まれ、梁の上で「焼夷弾」が燻っていたが教員が消し止めたという⁷³⁾。

d 藤 根

加藤昭雄の聞き取り調査によれば、花巻からエンジンや部品を牛車で運び、藤根の後藤野飛行場の格納庫を移築した組立工場でキ-115「剣」を完成させ、牛車で新設の「飛行機道路」を通り後藤野飛行場へ運んだという。

「飛行機は2機後藤野に運んだ。3機目を明日運ぶって時にバンザイ（終戦）になった。3機目は終戦の翌日に壊した。飛行機を馬で運ぶという話もあったが、馬はびっくりしたときに足速いから（駆け出すから）時間かかってもいいから牛で引かせることにしたんだ。馬車の上に飛行機の尾翼部分を乗せて、後ろ向きにバックで引っ張る。道路からはみ出してる木なんか、天下御免で職工が鋸持って歩いてついていってさ。……朝早く暗いうちに、4時半か5時頃運んだ」⁷⁴⁾。1機は敗戦の数日後飛行したという⁷⁵⁾。

「終戦後穴を掘って隠すとき、エンジンは23-4台あった。プロペラは何枚も、数えられねえな。9月か10月頃、進駐軍に書類か何か見つけられたのかな……在庫エンジンも『何個あったか』って、『埋めたのも掘ってかざれ』って。アメリカ兵が立ち会って帳簿さ合わせて、それに全部油かけて火つけて焼いたよ。すごい煙だったよ」⁷⁶⁾。

e 岩谷堂

1945年7月21日付「扶桑第一八六秘 第 号 キー一五・三型補助翼方向舵進捗会議覚書 扶桑第一八六工場長陸軍技術大尉奥山達男」（皆川資料）によれば、岩谷堂には「機械」の他に「現図」も置かれていた。ここではキ-115 III型の補助翼・方向舵の部品製造が、水沢・江釣子工場の協力を得て8月に可能となる予定であった。

f 横 手

横手工業高校の校史によれば、扶桑第190工場は横手国民学校（現在の横手工業高校の敷地に所在）に設置された。中島飛行機と横手町との貸借契約の成立は1945年7月8日であったが、1945年1月15日頃には既に機械などが搬入されていた。雨天体操場の床張りを剥し、コンクリートの土間に改造して機械を据付け、さらに二つの教室とグラウンド約半分を使用したため、学校はかなりの不自由を強いられたという。

1945年7月15日の空襲では、この校舎にも被害があった。「建物こそ倒壊しなかったが、窓ガラスが全部壊され、ノシ板、壁、屋根等の破損がはなはだしく、柱などもいたるところに弾痕があった。この空襲のあと勤労奉仕に行っていた1、2年生が学校に呼びもどされ、校内に土足で入って後片付けや応急修理にあたった。ガラスが入手できなかったので、教室には金網を張り、それにゼラチン（網目に不透明の薄い膜ができる）を塗って、ガラスの代用とした。また、焼夷弾による火災を防ぐために天井板をはがしてあったので、当時の校舎の荒廃ぶりは目を覆うばかりであったという」⁷⁷⁾。

動員学徒、菱刈隆永は次のように回想している。「7月中旬から秋田県横手地区における

表3 敗戦時における発動機部門の疎開状況

場 所	機 能	完成率 ^{a)}	使用設備	工場通称号
東京都五日市	航空用エンジンの実験	5% 又は 30% ^{b)}	地下工場を建設予定 ^{c)} 。第二十二製造廠の青年学校を近隣の国民学校に移転 ^{d)} 。	不 明
秋田県湯沢	エンジン試作	50% ^{e)}	酒蔵 ^{f)}	扶桑第 176 工場 ^{g)}

a) 場所・機能・完成率は前掲 USSBS 資料、USB-13 Roll. 222A による。完成率は 1945 年 7 月時点。

b) 前掲 USSBS 資料にこの二つの数字があり、どちらが正しいかは不明。なおこの資料によれば、五日市では 5 月に建設が始まり、6 月から実験用施設と約 10% の機械を移動した。

c) 前掲『富士重工業三十年史』49 頁、表-16 によれば、五日市では「耐弾地下工場」が計画または建設された。

d) 2009 年 1 月 24 日元三鷹研究所青年学校教員（1916 年生まれ）との面接より。秋川溪谷の近くの国民学校に訓練用の機械を移動させたとのことだが、学校名は不明。

e) 前掲 USSBS 資料、USB-13 Roll. 222A による。5 月に建設が始まり 6 月の終わりには約 90% の機械（約 100 台）を移動したが生産はできなかった。

f) 2003 年 8 月 29 日元三鷹研究所発動機試作工場工員（1919 年生まれ）からの聞き取り調査より。湯沢には中島飛行機疎開についての資料はほとんどない。わずかに秋田県立湯沢高等学校『湯沢高校五十年史』同校、1993 年、82 頁に、戦後米軍人が「中島工場」を調査したという記述だけが見られる。

g) 前掲「第一軍需工廠配属東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」53 頁。

疎開計画促進のため、企画課長の補佐として横手に移った。移転早々、艦載機の来襲があり、避難した後戻ってみると執務していた机に機銃の生々しい弾痕があった。ここまで空襲されてはもうだめだと思った」⁷⁸⁾。

5. 発動機部門の疎開

5.1. 発動機部門の疎開の概要

三鷹研究所発動機部門であった第一軍需工廠第二十二製造廠の本部は、最後まで三鷹にあった。機体部門と同様な図を作成すれば表 3 のようになる。

三鷹においては敗戦時まで発動機の研究開発がおこなわれたが、疎開先では稼働に至らなかった。

5.2. 五日市における地下工場建設⁷⁹⁾

五日市の疎開工場建築の中心になったのは、三鷹研究所の設計主任であった加倉井昭夫（俳人加倉井秋をととして知られる）である⁸⁰⁾。

「旧第一軍需工廠第二十二製造廠五日市支廠用地略図」⁸¹⁾（図 5 はこれに筆者が加筆したもの）によれば、現西多摩郡日の出町大久野の平井川流域が疎開工場の建設予定地であった。小沢正による地元住民からの聞き取り調査（2006 年 3 月）によれば、「1945 年のすでに暑くなった頃、朝鮮人労働者がやってきて 2 ヶ所に飯場を造り、6 ヶ所に長方形の穴を、つるはし・おかめ等の道具を使って人力で掘った。掘った土は長方形の穴の周りに土手状に盛り上げられ、その頂点から掘った穴の底までは 2 m 程だった。」

この話から推定すると、斜面を切り開いたくぼ地に建物を建て、掘り出した土を建物の屋根の上や側面にかぶせて草木を植え、建物を丘の小さな隆起した部分に隠す方式の、半地下式の工場を建設する予定だったようだ。そうすれば建物の上部に命中した直撃弾が建物の入口の至近弾のほか、すべての爆撃から建物は保護される⁸²⁾。

以下、図 5 に付した番号に従い説明する。

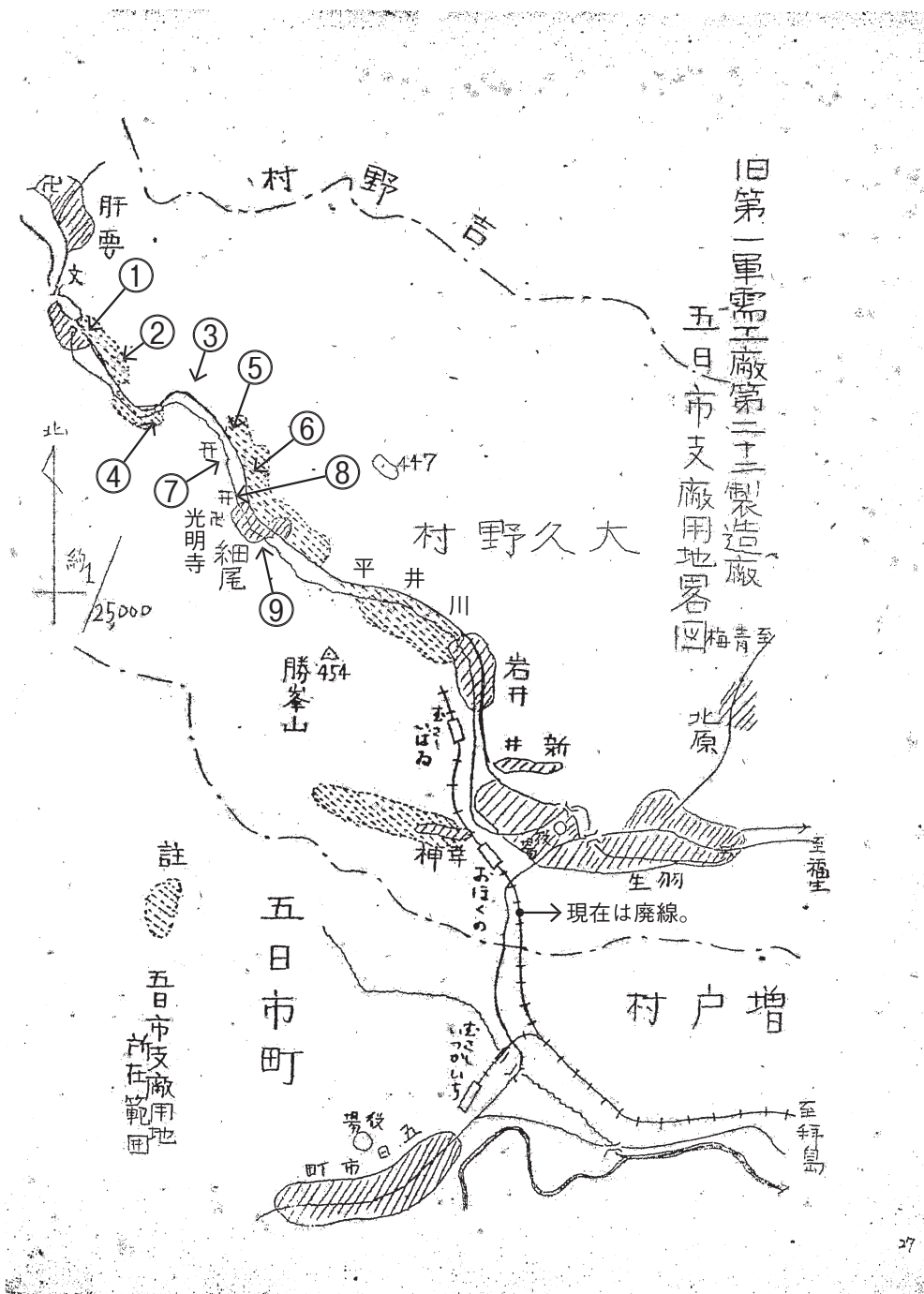


図5 五日市における発動機部門の用地略図

- ①ここも地下工場のため掘り下げられたが、⑥や⑦を掘った後手をつけたので、終戦時もそれほど掘られてはいなかった。
- ②飯場が作られ 5-6 人の朝鮮の人が住んでいた。
- ③「西ノ入」と呼ばれる場所で、現都道 184 号線から山に入る道（工事前からすでにあった）を数十 m 登った山の斜面を掘った。
- ④現在の「さかな園」マス池の場所が、長方形に掘られた（現在の池はあらためて掘ったもの）。
- ⑤⑥にあった穴の 3 分の 1 ほどの面積の穴があった。
- ⑥現在、特別養護老人ホーム藤香園の建物がある位置に長方形（南北約 60 m、東西約 15 m）の穴が掘られた。⑥、⑦が同規模で一番大きな穴だった。
- ⑦現在製材所のある場所が掘られていた。
- ⑧朝鮮の人の飯場があった。この付近の住民からの聞き取り調査によれば、「この辺りは川の両側の山が高いので空襲を避けるのにいい、という話だった。川岸に飯場ができた。小さなバラックが 3 棟横にならんでいた。作業服を着た朝鮮の人が住んでいた。何人いたかは覚えていないが、飯炊きの女性や子供もいた。家族で住んでいたのではない。川で野菜を洗っていた。自分たちはニンジンの葉は捨てていたが、それも食べると言っていた。この人たちは戦後まもなく立ち去った」⁸³⁾。
- ⑨現在の太平洋セメント碎石沈殿池にあたる場所に、セメント工場（当時は浅野セメントで軍需工場に指定されていた）で働いていた朝鮮人労働者の飯場があった。なお 1945 年 5 月 29 日にはこの谷間にも艦載機が P51 による機銃掃射があり、このセメント工場も襲われ 1 人が死亡した。

この工事建設には地元の国民学校学徒も動員されたようである。

「中島飛行機が大久野に疎開をしてくるということで、会社の築地に使う石を拾ってくれ、ということでした。毎日毎日、朝 8 時から夕方 4 時まで一日中、拾われました。相変わらずお昼になってもお弁当ありません。この石拾いも地獄です。とても子どもでは持ちあがらないような大きい石を拾わねばなりません。今のようにゴム草履もなんにもない時代ですので、その辛さと言ったらありません。素足で拾うのですが、川底には石にコケがついていて、つるつるすべるんです。その時の足の痛さは忘れられません。……この地獄の石ひろいが終わっても……今度は 8 月の強い日差しにさらされて、おカイコに使う綱つなぎです。何に使うかという、また中島飛行機の会社の窓につるすのです。そのころは空襲の時に、どこの家でも紙を細く切って、窓ガラスに貼っていました」⁸⁴⁾。

米本土攻撃用超大型爆撃機「富嶽」の発動機・ハ-54 の設計主任であった田中清史は、同機開発中止後、武蔵製作所の所属となって浅川と五日市の地下工場建設に参加し、五日市で

終戦を迎えた。1946年に田中は疎開先で大久野製作所（現、東京プラント）を設立したが、間もなくこの会社は三鷹に移転した⁸⁵⁾。

5.3. 湯沢への疎開

湯沢への疎開については、今のところ次の元工員からの聞き取り調査以外に情報はない。「1945年4月の中ごろ湯沢への転勤命令が出た。三つのヒノキの木箱が支給され、それに生活用品をつめて送り5月7日に出発した。団体ではなく個々人で移動した。

タバコ屋さんの家が2階で、そこに3-4人で宿泊した。他の工員も民家に分宿していた。湯沢町にあった日本酒『爛漫』を製造する酒蔵を、工場にすることだった。上役とともに機械をどのように配置するかを検討した。5-6棟そのような倉があったと思う。一つの倉に7-8位の機械を置く予定だった。倉の横に前からあった建物を利用したらしい大きな食堂があって、朝夕疎開してきた中島の人達が集まった。50-60人いたと思う。それが先遣部隊だったと思う。機械が輸送されてきたのを見たが、据え付けたかどうかは覚えていない。結局動かす前に終戦となった。

退職金が支払われて2,000円もらった。10月くらいに東京に戻り、露天商をやった。湯沢の製造元から漆塗りのお椀を退職金で仕入れ、闇市で売ったら列ができて瞬く間に売り切れ、一時的だが儲けることができた⁸⁶⁾。

6. 敗戦時における三鷹の状況

1945年8月15日正午、昭和天皇のポツダム宣言受諾を告げるラジオ放送を、三鷹では機体部門の研究・設計本館前、発動機部門の研究本館前、発動機試作工場前の広場などで、各部署ごとに整列して聴いたようだ。その後各部署では進駐軍による責任追求を恐れ、軍需品製造の証拠を隠滅するため、書類を各建物の窓から落とす等して焼却した⁸⁷⁾。

「発動機の研究本館の横でラジオを聴いた。負けたことはわかった。『兵隊にいかないですんだ！ 助かった！』と思った。1週間かかって書類を燃やした。ここで飛行機をやっていたこと自体をわからなくしようとバスの車体を置いた。大きな穴を掘って、試作工場だからそれほど数はなかったがエンジンを埋め、エンジンの運転台『ダルマ』も埋めた⁸⁸⁾。

「キ-87に搭載されるはずだった機関砲を、野川の近くの爆弾でできた穴の中に落として埋めた。1人にやらせたのでは信用できないということで3人がかり運んだ⁸⁹⁾。

一方で従業員や近所の住人による物資の持ち出しが敗戦の日から始まったようだ。発動機試作工場では放送が終わってまもなく、徴用された工員などが備品を持ち去り始めたという⁹⁰⁾。他の部署も似たような状況だったようだ。

「研究本館のカーテンも持ち去られた。研究本館にはピアノがあったが、それをオート三輪で持ち去った人もいた。徴用された人ばかりでなく、中島飛行機の職員でも同じようなこ

とをした。特に食堂に備蓄されていた食糧は貴重で、それを厚生課の職員が持ち去った」⁹¹⁾。

「三鷹研究所には、構内で焼いた炭が入った炭俵が大量にあった。この炭俵を近くの駐在所にいた巡査が欲しがった。仕事柄彼は自分では持ってくるできないので、守衛をしていた私に頼んだ。私は2俵を巡査に渡し3俵は自分のものにした。近くの長屋の住人は、リヤカーでモーターを5-6台持ち出して警察に逮捕された」⁹²⁾。

「みんなが物資を持ち出しているという話を聞いて行ってみたが、もう目ぼしいものはなく、木刀と蠟の固まりだけを持ってきた。蠟は溶かして竹を半分割った中に流し込み、風糸を芯にして蠟燭にした。停電がよくあったので重宝した」⁹³⁾。

次のような回想記もある。

「……三鷹研究所の終末こそ、敗戦の姿を象徴するものだったろう。……もう夕刻だったと思う。……言いようもない現場の情景に愕然とした。……あの重い机やロッカーを、どのようにして運び去ったのだろう。広い部屋はガランとして、1脚の机もなく、1枚のカーテンも残っていないではないか、どの部屋もどの部屋も同じありさまである。窓から望む遙かな、厚生倉庫や格納庫周辺一帯には、まだ黒い人影の群れがうごめいている、思い思いに物を持ち去り、手当たり次第に目ぼしい物を漁り狂う有りさまはあさましく醜い限りで、飢餓地獄もかくやと思わせるものであった。周辺一帯の住民を巻きこんだ集団略奪に、何等施すすべもないまま、夜ひるの別なく、或る者はリヤカーで、ある者は大八車で、強欲な奴は引込線を利用して、材木、鋼材、燃料、機械類にいたるまで、恥も外聞もなく運び去るのである。そんな日が延えん一週間も続いたろうか。……広大を誇った三鷹研究所は、建物だけが空しくそびえ、略奪の跡は無残に散乱していた。なぜかビン詰めの商品だけが取り残されていた」⁹⁴⁾。

第二十一製造廠が解散したのは8月25日、第二十二製造廠が解散したのは8月26日だった⁹⁵⁾。

「解散式で渡された封筒に1,000円入っており、大金だったので驚いたが、使わない内に新円封鎖で使えなくなってしまった」⁹⁶⁾。

戦後、疎開作業が進んでいた三鷹の機体部門の敷地・建物は、中島飛行機の後身・富士産業から1948年に国際基督教大学に売却された。一方、最後まで本部が置かれた三鷹の発動機部門の施設は、富士産業さらには富士重工業の主要なエンジン工場となっていった。

7. おわりに

三鷹研究所は稼働するのが遅すぎたため、実際の戦力増強には全く役に立たずに終わった。そして米軍による激しい空襲により、戦争の総力戦としての性格が徹底し、前線・銃後の区別が無くなる中、今から見れば絶望的な特攻作戦の戦力増強のため、かえって稼働にマ

イナスとなるにも関わらず研究所の疎開を行い、動員された学徒、朝鮮人労働者も含めた膨大な労力が費やされた。これは総力戦という状況下で、国家によって厳しい思想統制および情報統制がなされると、末端的な組織までもが大局的な合理性なしに極限まで突き進んでしまう一例といえるだろう。また敗戦時の混乱は、人々が経済的に限界に追い込まれていたことを示すものであるとともに、全体主義の裏にある個々人のモラルの脆さが露呈したものと見えるだろう。

戦後、機体部門の疎開工場は富士産業岩手工場、1950年には岩手富士産業となり、三鷹研究所の技術者が中心となって、主に水沢で戦禍による荒廃からの復興に必要な林業および土木建築業関係の機械の生産を行った（1980年買収によりイワフジ工業となり現在に至る）⁹⁷⁾。飛行機の機体製作技術を活かして軽量の林業機械を開発し、一時は良く売れたという⁹⁸⁾。これは疎開と敗戦の結果、中央から地方へ、軍需から民需へと技術移転がなされた一例といえよう。疎開を積極的に受け入れた岩手県側の意図が一部実現したともいえる。三鷹研究所の疎開の、現在から見た功績を挙げるとすればこれであろう。

註

- 1) 高柳昌久・牛田守彦『戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版』ぶんしん出版、2006年、112-128, 170-178頁。
- 2) 齊藤勉『東京都学徒労働員の研究』のんぶる舎、1999年、515-519頁。
- 3) 『朝日新聞』、2005年8月14日岩手12版、2005年8月23日第2東京版。
- 4) 1919年生まれ。東京高等工芸学校精密機械科卒業後、1942年中島飛行機入社。太田製作所設計部統制課で2000t油圧ゴムプレスによるジュラルミン板のプレス加工の実験に従事。1944年3月三鷹研究所に転勤。戦後は岩手富士産業(株)に勤務。
- 5) 『朝日新聞』、2006年1月18日岩手12版。NHK盛岡放送局「地下に眠る戦争の傷跡——戦闘機製造にかけた5ヵ月間の記録——」（25分）、2006年7月7日岩手県で放映。その他、筆者は調査結果の一部を市民団体「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」の会報・『戦争のきずあと・むさしの』13号（2004年10月20日）、14号（2005年1月20日）、15号（2005年3月24日）、16号（2005年5月25日）、17号（2005年7月20日）、18号（2005年10月20日）に発表した。
- 6) 米軍資料“CINCPAC-CINCPOA, Special Advance Report, Nakajima Aircraft Factories, 15 Dec. 1944”（米国国立公文書館所蔵）によれば、米軍は、中島飛行機に部品を供給していた工場ですら1942年9月まで働いていた捕虜を尋問し、この情報を得た。三鷹研究所を空襲目標とする米軍資料は発見されていない。ただし1945年2月17日、空母バンカーヒルから発進し、目標として武蔵製作所を空襲した4機のF4Uが帰途、三鷹研究所をロケット弾で攻撃したが戦果不明という記録は、USSBS資料、USB-6, R6、国立国会図書館憲政資料室所蔵にみられる。
- 7) 青木邦弘『中島戦闘機設計者の回想』光人社、1999年、176頁。
- 8) 都立玉泉中学同窓会『玉泉』自費出版、1990年、51頁。前間孝則『富嶽 米本土を爆撃せよ』講談社、1991年、551頁、中稲会編『中島飛行機学徒動員の記録 戦争と共に歩んだ青春』中稲会事務所、1996年、167頁に類似の記述がある。前間によればこの出来事は1944年12月3

日に起きた。

- 9) 前掲『玉泉』67頁。櫻井隆『陸軍飛行第244戦隊史』そうぶん社、1995年、69-70頁によればこれは1944年12月3日の出来事で、四宮徹中尉機のことと思われる。
- 10) 前掲『玉泉』33頁。前掲『陸軍飛行第244戦隊史』112頁に類似の撃墜の記述があるので1945年2月19日の出来事と考えられる。
- 11) 渡辺洋二『死闘の本土上空』文芸春秋、2001年、341-353頁。前掲『陸軍飛行第244戦隊史』101-110頁。なお調布飛行場近くの高射砲陣地では4名の兵士が戦死した（三鷹戦時下の記録編集委員会『いま語り伝えたいこと』三鷹市、1986年、258-262頁）。
- 12) 前掲『中島飛行機学徒動員の記録』190頁。
- 13) 帝都防空本部発表（東京都編『東京都戦災誌』東京都、1953年、314頁）、USSBS資料、USB-13, Roll. 222A、国立国会図書館憲政資料室所蔵による。死傷者数は前者によれば死亡2名、重傷4名、軽傷4名であるが、「工具4名が壕で生き埋めになった……その葬儀が深大寺で行われた」（東大十八史会編『学徒出陣の記録』中央公論社、1968年、190頁）という回想もあるので、重傷者のうち2名がその後死亡したのだろう。「救出に手間取った」件については、2002年5月17日三鷹研究所発動機試作工場に動員された元都立機械工業学校学徒との電話より。
- 14) 三鷹研究所機体組立工場に配属された元都立工業専門学校学徒、佐藤東喜彦の回想（福岡県高教組八女支部『私たちの戦争体験の記録・六——平和教育のために』同支部、1987年、9頁）。
- 15) 2002年10月5日元三鷹研究所機体組立工場工具（1928年生まれ）との面接より。
- 16) 2007年1月25日三鷹研究所総務部会計課に配属された元武蔵野女子学院学徒（1928年生まれ）との面接より。この時の動員学徒の体験談については、拙稿「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」国際基督教大学アジア文化研究所『アジア文化研究』32号、2006年、192-193頁を参照されたい。
- 17) 齊藤健「第一軍需工廠配属 東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」『東京大学史紀要』第17号、1999年3月、45頁。なおこの資料によれば、東大文学部から三鷹研究所に動員された約8割の学徒の住居が全焼または半焼し、蔵書や勉強資料を失ったという。
- 18) 齊藤勉『中央本線419列車』のんぶる社、1992年、229頁。
- 19) 前掲『中島戦闘機設計者の回想』197頁。
- 20) 同上。1945年8月28日米軍撮影の航空写真（米国立公文書館所蔵）には、当時野川に設けられていた三鷹研究所の貯木場の西に、爆弾の跡のような穴の列が南北に見られる。なお都立野川公園二枚橋付近の「あか池」は空襲で出来た穴に湧水が溜まったものだという（『アサヒタウンズ』多摩東版、2008年6月8日）。
- 21) 2002年9月20日当時三鷹町大沢在住で、三鷹研究所機体組立工場に配属された元三鷹第二国民学校学徒（1931年生まれ）との面接より。
- 22) 2002年8月6日当時泰山荘に居住していた中島知久平の運転手の子女で三鷹研究所機体部門の元職員（1927年生まれ）との面接より。
- 23) 前掲2002年10月5日の面接より。
- 24) 同上。野川の崖の防空壕の天井から爆弾の頭が突き出ていたという回想もある（2002年10月23日元都立機械工業学校学徒同窓会「小金井三機会」での宮憲之典による聞き取り調査の録音、および2004年3月28日三鷹研究所機体部門材料研究に配属された元玉泉中学学徒（1931年生まれ）との面接より）。
- 25) 前掲2002年8月6日の面接より。話者は当時小山悌廠長の秘書を勤めていたという。

- 26) 西三鷹むかしむかし編集委員会『西三鷹むかしむかし』井口地区住民協議会、1983 年、37 頁。
東野史編さん委員会『ひがしの史』東野会、1991 年、26, 36, 45 頁。当時の東野住宅の防空対策については井之口章次編『三鷹の民俗 三深大寺』三鷹市教育委員会、1982 年、120 頁を参照されたい。
- 27) 前掲 USSBS 資料、USB-13, Roll. 222A。
- 28) 前掲「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」192-193 頁。前掲『学徒出陣の記録』178 頁によれば運輸課は「空襲があるとトラックを疎開させるのが第一目的で、さっそく配車し、課員全員隣の埼玉県に逃走した」。
- 29) 前掲『玉泉』58-59 頁。村越知世『多磨霊園』郷学舎、1981 年、58 頁にもこの工場移転についての記述がある。移転の際の学徒の体験については前掲「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」193-194 頁を参照されたい。
- 30) 「中島飛行機名簿 重役・参事・一等技師・一等主事・二等技師・二等主事 昭和 20 年 9 月 25 日」(太田繁一所蔵)より推定するとそれぞれの製造廠には次のような組織があった。第二十一製造廠には、設計部、製作部(組立工場、特殊工場、工務課)、治具工場、検査部(成品検査課、飛行課、飛行課整備工場)、総務部(勤労課、厚生課、営繕課、文章課、防衛課、庶務課、運輸課、企画課)、会計部(経理課、管理課、整理課)、黒沢尻工場、横手地区機械工場、三鷹出張所。第二十二製造廠には、研究部(材料検査課、業務課)、設計部(第一設計、第四設計、図書、業務)、試作部(工作課、生産技術課、検査課、業務課)、実験部(第一実験課、第二実験課、第三実験課、第四実験課、業務課)、総務部(人事課、庶務課、営繕課、勤労課、防衛課)、会計部(調弁課、運輸課)、湯沢岩崎地区工場(工務課、設計課、総務課)。
- 31) 富士重工業(株)社史編纂委員会編『富士重工業三十年史』同社、1984 年、47-48 頁。前掲「第一軍需工廠配属 東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」50 頁。国営化については麻島昭一「第 2 次世界大戦末期の中島飛行機」『専修大学経営研究所報』第 65 号、1985 年 10 月が詳しい。
- 32) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 陸軍航空兵器の開発・生産・補給』朝雲新聞社、1975 年、491-496 頁。
- 33) 陸軍航空本部「航空機工場ノ急速分散ニ関スル綴」1945 年 3 月(防衛研究所図書館蔵)。なお陸軍航空本部・軍需省「機体関係分散疎開並ニ地下移転計画(案)」1945 年 3 月 6 日(航空本部「生産組織疎開計画並実施状況」1945 年 3 月、防衛研究所図書館蔵)には、東北地区においては須賀川・白河地区のキ-115 関係の分散・地下工場を優先して建設し、これと並行してキ-87 と「ロケット関係」の試作工場を建設し、次いで秋田地区に「ロケット機」生産体制を確立し、花巻・黒沢尻には中島飛行機の研究部門を置くという、大まかな計画が見られる。軍需省においては 1945 年 3 月に、疎開計画が急速に具体化されたことが窺える。
- 34) 前掲「第一軍需工廠配属 東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」50 頁。
- 35) 例えば 1943 年 11 月に中島飛行機は栃木県の大谷石採掘場を地下工場建設のため買収している(前掲『富士重工業三十年史』48 頁。渡部一英『日本の飛行機王 中島知久平』光人社、1997 年、392 頁)。
- 36) 2002 年 4 月 15 日元三鷹研究所機体部門総務部企画課係長、西村忠雄(1914 年生まれ)との面接より。同課所属だった東大学徒の回想記が黒住武・菱刈隆永「みちのくへの工場疎開」(前掲『学徒出陣の記録』188-194 頁)である。
- 37) 松田敏夫(1910-2006 年)のメモ(松田稔所蔵)。メモ用紙から 1995 年頃書いたものと思われる。なお敏夫の子息・松田稔によれば松田敏夫は生前「上野駅に三鷹研究所疎開の荷物は無事到着

- 着し、それを積み込む貨車も確保されているのに、駅長によれば荷物を貨車に運ぶ人手の確保がなされておらず、仕方なく上野駅前に当時大勢たむろしていた若い衆にその親方を紹介してもらい、頭を下げて荷物運びを依頼した。足元を見られ米で支払えと言われだいたいぶっつけられた」と語っていたという。当時の統制経済の裏面が窺える。
- 38) 全体的な状況から推定すると、1944 年 7 月 9 日の米軍によるサイパン島占領のことだろう。
 - 39) 「八高線沿線」は前掲「中島飛行機(株)三鷹研究所の岩手県黒沢尻地区への工場疎開」に記述がみられる。「会津若松」は 2002 年 7 月 16 日元三鷹研究所機体部門会計課職員（1925 年生まれ）との面接より。この職員は会津若松で地元の有力者に丁重に迎えられ、初めて中島飛行機の力を実感したという。
 - 40) 前掲『玉泉』41 頁。前掲『私たちの戦争体験の記録・六——平和教育のために』12 頁。
 - 41) 前掲『中島戦闘機設計者の回想』198-199 頁。
 - 42) 前掲 2002 年 10 月 5 日の面接より。仙台の空襲は 7 月 10 日、宇都宮の空襲は 7 月 12 日。
 - 43) 2005 年 2 月 8 日三鷹研究所機体部門治具設計に配属された元航空科学専門学校学徒（1925 年生まれ）との面接より。
 - 44) 2002 年 7 月 18 日三鷹研究所機体部門設計部に配属された元都立航空工業専門学校学徒（1927 年生まれ）との面接より。
 - 45) 前掲 USSBS 資料、USB-13, Roll. 222A。
 - 46) 小島鉄工所（高崎市）製。高さ 6.4 m、幅 5.6 m、重量 150 t（「小島鉄工所 中村 19、9、30 中島飛行機株式会社三鷹研究所機体設計部工作研究班皆川進様 二千噸油圧成型機重量之件」・「2000 ton ゴムプレス工場機械配置要領 Scale 1/50」、皆川資料）。この機械は 1942 年 1 月にキ-87 の部品製造のため三鷹研究所が注文したものだったが、1944 年 11 月軍需省は太田製作所に納入するよう指示した。三鷹研究所と太田製作所などの話し合いにより、三鷹研究所への納入が決定したが、その後も軍需省は太田に納入するよう指示した。つまり中島飛行機内部でさえ、軍需省も巻き込んで、貴重な機械を取り合っていたのだ。最終的には三鷹研究所の疎開先である横川目に納入されることになったが、地下工場が完成しなかったため結局納入されなかった。なお 1945 年 7 月段階でプレス本体は完成していたが、付属品については納入の見込みが立たないものもあった（「二千屯ゴムプレス進捗状況並ビニ納入ニ関スル件 昭和二十年七月十八日 扶桑第一八六横川目工場皆川進」皆川資料および皆川進との面接より）。
 - 47) 「東北神第一八二工場横川目支部設営現状報告 20—5:20」皆川資料。
 - 48) 「七月二日現在 右間組山崎氏調査に依る 企画 皆川技師補殿」皆川資料。
 - 49) その後 38 名となったようである（作成年月日不詳「横川目作業人名」皆川資料）。
 - 50) 「六月十四日 下山技師 皆川技師補宛メモ」皆川資料。
 - 51) 皆川資料、「2000 噸プレス工場 縦断面図 Scale = 1/200 二〇、六、一七」（2 枚あり、数字が若干異なる）、「2000 ton 工場 Scale = 1/50」・「第一号熱処理工場縦断面 Scale = 1/100 二〇、六、一七」、「第二熱処理工場縦断面 Scale = 1/100 二〇、六、一七」。
 - 52) 「(参考) 中島飛行機藪塚地下工場の建設・使用計画及び工事進度」太田市『太田市史 史料編 近現代』同市、1987 年、526 頁によれば、凝灰岩の地質で 15 m 以上であれば 1 t 爆弾にも耐えるという。
 - 53) 皆川資料。同じ題名・日付の資料がもう 1 部存在し、そこでは 2,000 t ゴムプレスを設置する地下工場の床面積を「最小限」にすることが計画されている。
 - 54) 米 100 g のカロリーは玄米で 350 kcal。精白米で 356 kcal。日本人の栄養所要量は、生活活動強

度が「高い」（例、安静 9 時間、立つ 8 時間、歩く 5 時間、速歩 1 時間、筋運動 1 時間）18-29 歳男子で、2,950 kcal 必要である（厚生省「第六次改定日本人の栄養所要量」1999 年より）。配給された米が玄米だったとすると、450 g で 1,575 kcal。副食が乏しかった（皆川進によれば、味噌は豊富にあったが、味噌汁の具は山菜や冬だから干し大根ぐらいだった）ことを考えると食料はずいぶん不足していたことになる。なお皆川進によれば、間組の職員 2 名が、朝鮮人労務者のための闇米を買ったため戦後逮捕され、裁判にかけられたという。また、この地下工場建設の労働者との関係は不明だが、横川目小学校創立百年祭実行委員会『横川目小学校百年のあゆみ』同校、1973 年、43 頁には敗戦後のことと思われる次のような記述がある。「半分以上掘り返され畑となった……校庭の大根は大きくなったが当時三国人と呼ばれる人達がやって来て買っていった。生のまま丸ごとかじっていた」。

- 55) 「今後使用すべき洋釘調書 株式会社間組山崎印」（作成年月日不詳、皆川資料）によれば増築される飯場が 160 坪、修理する飯場が 327 坪となっている。重複がないとすれば計 487 坪（約 1,610 m²）である。当時労務者 1 名に必要とされた飯場の面積を 2.747 m²（日垣隆『松代大本営』の真実』講談社、1994 年、129 頁）とすると、この飯場に収容可能な労務者は 586 名となる。やはり間組が作成したと見られる「地下工場用資材関係明細書 扶桑一八六横川目工場」（作成年月日不詳、皆川資料）にはゴム長靴 400 足とある。間組は中島飛行機の要求を達成するために、400-500 名以上の労務者が必要と考えていたと推定される。
- 56) 2004 年 8 月 25 日、当時から現在まで横川目在住の元横川目国民学校高等科学徒（1932 年生まれ）との面接より。
- 57) 前掲『学徒出陣の記録』193-194 頁。なおこの芝居小屋「横黒館」は戦後、大物の歌手が食料の買出しを兼ねてぞくぞくと公演に訪れ、テレビが普及するまでは賑わったという（小田島恭二『和賀の逸話』和賀町文化協会、1993 年、71, 76 頁）。
- 58) 中央を除く、西側と東側の穴については、戦後の農業用水路隧道の掘削により床が崩落しているため、崩落箇所より奥の部分は計測できなかった。従ってこの 2 つの穴は実際には計測値以上に長い。また中央の穴の最奥部の天井には、幅約 1 m、奥行き約 2 m、深さ約 0.5 m の平坦な穴が掘られている。上の穴に繋ぐための縦穴を掘ろうとしたのかもしれない。
- 59) ジェットエンジンを搭載した戦闘爆撃機。前橋第二工場（中島飛行機太田製作所の研究試作部門の一部が 1944 年 11 月に疎開した「皇国第 553 工場」）で、1945 年 4 月設計が開始され、現図が完成し実物大模型の製作に着手したところで敗戦となった（USSBS 資料、USB-Roll. 222、国立国会図書館憲政資料室所蔵）。
- 60) 正式名称は水澤陸軍飛行場。本土決戦に備える特攻隊専用の秘匿飛行場として、1945 年 4 月から建設作業が始まった。県内の中等学校学徒約 2,000 名も動員された。滑走路は 6 月下旬に竣工したが、試験飛行等で数機が発着しただけで敗戦を迎えた（加藤昭雄『岩手の戦争遺跡をあるく』熊谷印刷出版部、2006 年、96 頁）。
- 61) 前橋第二工場で、キ-115 を木製化し離着陸性能を向上させようとしたもの。原図の完成のみで終わった（前掲 USSBS 資料、USB-Roll. 222）。
- 62) キ-115 II でもキ-115 よりは座席の位置を前進させ、視界の向上を図ったが、それをさらに前進させたもの。計画のみに終わった（野沢正編著『日本航空機総集中島篇』出版協同社、1983 年、138 頁）。
- 63) 前掲『水商 50 年史』64 頁、水沢市史編纂委員会『水沢市史』5、水沢市、1990 年、485 頁、佐倉河小学校『百年史』同校、1973 年、49 頁による。

- 64) 前掲 2002 年 10 月 5 日の面接より。
- 65) 前掲『黒陵 50 年史 1974』119 頁。
- 66) 2004 年 10 月 8 日機関銃を発掘した元扶桑 184 工場従業員・及川力男（1927 年生まれ）との電話より。この件は 1990 年 12 月 21 日「岩手日報」が報道した。なお敗戦時には黒沢尻中学でも書類を焼却したという（2005 年 9 月 29 日元三鷹研究所機体部門設計部技師補、後岩手富士産業勤務（1916 年生まれ）との面接より）。
- 67) 前掲「扶桑一八九秘第一号昭和二十年六月十四日 扶桑第一八九工場設営計画書（含扶桑第一八四工場之一部）扶桑第一八九工場長 認可陸軍技術大尉奥山龍男 作製陸軍技術中尉齊藤次郎」によれば、「扶桑第 185 工場」である。
- 68) 前掲『桜雲四十五年史』70, 72, 229, 230 頁。岩手県立花巻北高等学校『桜雲六十年史』同校、1992 年、88, 388 頁。
- 69) 2005 年 8 月 24 日元花巻中学学徒（1929 年生まれ）との電話より。ただし皆川進の回想記によれば、その部品はまだ岩手県内では作れず太田製作所で製造されたものだという。
- 70) 1945 年 8 月 11 日には、講堂に製造中のキ-115 の胴体が 2-3 体並べてあったという（前掲『後藤野——最北の特攻出撃基地——』165-168 頁）。
- 71) 前掲『桜雲四十五年史』70 頁。
- 72) 前掲『江釣子村史』773, 967 頁。
- 73) 前掲『百年の歩み』54, 58, 59 頁。特に 54 頁には、1945 年 5 月 1 日締結の江釣子村と第一軍需工廠第二十一製造廠との契約書が掲載されている。
- 74) 前掲『後藤野 全国からの便り』38-40 頁。
- 75) 前掲『後藤野——最北の特攻出撃基地——』166 頁。
- 76) 前掲『後藤野 全国からの便り』39 頁。
- 77) 雨天体操場の工場が撤去されたのは 1950 年 10 月 10 日で、その際機械の一部は同校機械科に払下げとなった。前掲『若った四十年の歩み』36, 37, 151-153 頁。横手市郷土史研究会『横手郷土史資料』同会、第 42 号、81 頁。
- 78) 前掲『学徒出陣の記録』192 頁。2002 年 3 月 25 日三鷹研究所機体部門総務課に配属された元東大文学部学徒・菱刈隆永（1922 年生まれ）との面接より。
- 79) 五日市における地下工場建設については、筆者の依頼による小沢正（『日の出町史・通史下巻』2006 年編纂委員）の調査結果を略述する。調査経過については拙稿「中島飛行機三鷹研究所発動機部門の五日市への疎開について」（武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会『戦争のきずあと・むさしの』第 30 号、2009 年、20-21 頁）を参照されたい。
- 80) 1945 年 4 月大倉土木を退社し、第一軍需工廠の五日市支廠建築課長となった（高橋謙次郎編著『昭和俳句文学アルバム 10 加倉井秋の世界』梅里書房、1992 年、9 頁）。加倉井秋を『武蔵野抄』牧羊社、1982 年、313 頁には、「戦争が敗戦の様相を帯びはじめた頃は、防空壕に入るときも、地下工場建設のために、凝灰岩系の山岳地帯をもとめて東北を流浪する場合にも、私は改造文庫の『芭蕉遺語集』『俳諧七部集』を肌身離さなかった。この二冊は当時の荒んだ私の鎮魂の書であった。終戦と同時に、私は地下工場建設の奥多摩の谷から再び東京へ戻った」とある。
- 81) 東京都公文書館蔵「昭和 24 年度労働経済局自作農関係文書 4」。
- 82) 富永謙吾編『現代史資料 太平洋戦争』5、みすず書房、1975 年、147 頁にこのような地下工場についての記述がある。
- 83) 2006 年 3 月 31 日地元住民（1919 年生まれ）との面接より。

- 84) あきる野市9条の会・戦争を語り継ぐ会篇『続 私たちの戦争体験記二〇〇八年一二月』憲法九条で平和を守るあきる野9条の会、2008年、9頁。
- 85) 1948年東京プラントの工場は三鷹に移転した。水谷総太郎「超大型爆撃機「富嶽」のエンジン」『日本機械学会誌』第85巻、第766号、1982年、17頁。東京プラント(株)HP「会社沿革」(<http://www.tokyo-plant.co.jp/company/history.html>)、2010年8月26日閲覧。
- 86) 前掲2003年8月29日の面接より。
- 87) 2002年5月11日三鷹研究所発動機試作工場に配属された元都立第五高等学校学徒との面接、2002年8月14日三鷹研究所機体部門の事務・製図担当の職員(1926年生まれ)との面接、2002年8月7日元三鷹研究所発動機部門設計部技師(1919年生まれ)との面接、2003年8月25日元三鷹研究所発動機部門事務員(1921年生まれ)との面接、2005年7月29日三鷹研究所機体部門原図等に動員された元玉泉中学学徒(1930年生まれ)との面接より。
- 88) 元三鷹研究所発動機部門研究部技術員、増田哲三(1921年生まれ)からの聞き書きである「プリンスエンジンストーリー」『Nostalgic Hero』芸文社、vol. 53、1996年2月、73頁。2004年10月24日増田哲三との電話より。
- 89) 2002年10月13日元三鷹研究所機体組立工場工具(1920年生まれ)との面接より。
- 90) 前掲「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」194頁。
- 91) 2002年7月16日元三鷹研究所機体部門会計課職員(1925年生まれ)との面接より。
- 92) 2002年11月25日元三鷹研究所守衛(1916年生まれ)との面接より。
- 93) 2002年9月20日三鷹研究所機体組立工場に配属された元三鷹第二国民学校学徒(1931年生まれ)との面接より。
- 94) 矢根軍市「二、日本転換の日の断面——ああ中島飛行機三鷹研究所の末路——」、鮫島健男編『思いをはるか太田に その1』紅雄会同人、1976年、18-24頁。
- 95) 前掲「第一軍需工廠配属東京帝国大学文学部勤労報国隊報告書」57頁。
- 96) 前掲2002年7月16日の面接より。
- 97) 前掲『水沢市史』5、485-486頁。イワフジ(株)HP「会社沿革」(<http://www.iwafuji.co.jp/company/history.htm>)、2010年8月26日閲覧。前掲松田敏夫のメモによれば、中島知久平は泰山荘を訪れたとみられる松田(後に岩手富士産業社長)に対し、終戦後は大変な住宅ブームになるから岩手でプレハブ住宅を流れ作業で生産せよと勧めたという。特需景気を予言するなど(碓義朗『さらば空中戦艦富嶽』光人社、2002年、220頁参照)、日本の航空機産業を勃興させた中島知久平の、産業の盛衰に対する見通しには鋭いものがあったようだ。
- 98) 前掲2005年9月29日の面接より。元廠長、小山悌も林業機械開発に活躍したようだ(前掲『富嶽 米本土を爆撃せよ』91頁)。